

第6章 3区の調査成果

第1節 概要

3区は現在の耕作地と住宅域との境にあたる（図2）。北西にのびる尾根筋上に位置し、北から東にかけて谷が入り込む地形となる（図1）。調査区面積742m²。調査前地盤高はT.P.+67～68m。写真撮影用の足場を確保するため、3-1・3・4区から先行して調査した。現代の耕作土を重機で10～20cm除去し、堆積のある部分では2～20cmの包含層を人力掘削した。

遺構検出面は地山面1面である。3-1・2区でT.P.+67.8m前後、3-3区で約T.P.+67.1m、3-4区では約T.P.+66.5mと東側へ低くなる。特に3-3区では耕作土直下で地盤層にいたるなど、削平が著しい。竪穴建物4棟以上（建替え含む）、掘立柱建物4棟、ピット列3列のほか、溝、土坑、ピットを検出した。3-4区はピット3基のみの検出で遺構はほとんどない。出土遺物は、弥生土器が8割程度を占め、次いで須恵器、土師器がある。瓦器は少量混じる程度である。そのほか、陶器、瓦、石製品などが出土している。

第2節 層序

調査区の北辺、3-1区は南辺も合せて、3-4区は北辺から西辺にかけて、耕作土を除去したT.P.+66.8～67.9mから地山面まで観察・図化を行った（図39～41）。

層序は、黄褐色の現代耕作土（①層）、黄褐色粘質土の床土（南壁②・北壁③層）、黄褐色ベースの遺物包含層（南壁③～⑨・北壁④～⑪層）が水平堆積する。土層の単位が大きく整地に伴うものであろう。3-2・3区では、遺構検出面上に、灰黄褐色の砂混じり粘質土（北壁⑫層）がごく薄く堆積する。この層がない部分でも、北壁⑥層下位の層境に砂質土が混じっており、3区中央では一面で砂質土の堆積があったものと考えられる。3-4区はX=-165140.4m以北で地山が急激に落ち、砂～礫が自然堆積する。旧地形では北側の谷地がさらに南東側へ入り込んでいたものと考えられる。

第3節 遺構と遺物

（1）竪穴建物（図42～46、図版10～12）

SH625 3-3区の現代耕作土を除去した時点で、方形のプランを確認したものである（図42、図版10）。平面で壁溝を検出後、土層観察用のベルトを残して建物内を掘り下げた。ベルトは各辺の中軸を一連で観察できるように、「L」字を組み合わせた形で設定した。検出面から床面までは深いところでも10cm程度しかなく残存状況は悪かったが、壁溝（SD656、686、694）と周囲をめぐる溝（SD614、626）、柱穴と思われるピット等を検出した。竪穴建物はほぼ同じ位置、方向（N-30°-W）で3棟以上が重複する。規模は建替えを重ねるごとに拡大しており、プランは長軸を東北-南西にもつ長方形から正方形へと変遷する。以下、切り合いで推定される建替え順に詳述する。

SD656 最も内側で北東から北西、南西、一部南東をめぐる断面「U」字形の溝。この溝によって囲まれる竪穴建物は南西-北東4.9m、北西-南東4.3mを測り、長方形プランをとる。壁溝は深いところでも検出面から15cm程度しかない。

SD686 北西から南西をめぐる。図42で（SD686）とした北東辺、南西辺は同一の溝である確証はなく、特に南西辺は切り合いや位置から考えて別遺構と考えるべきであろう。ただしこれ以上拡張する壁

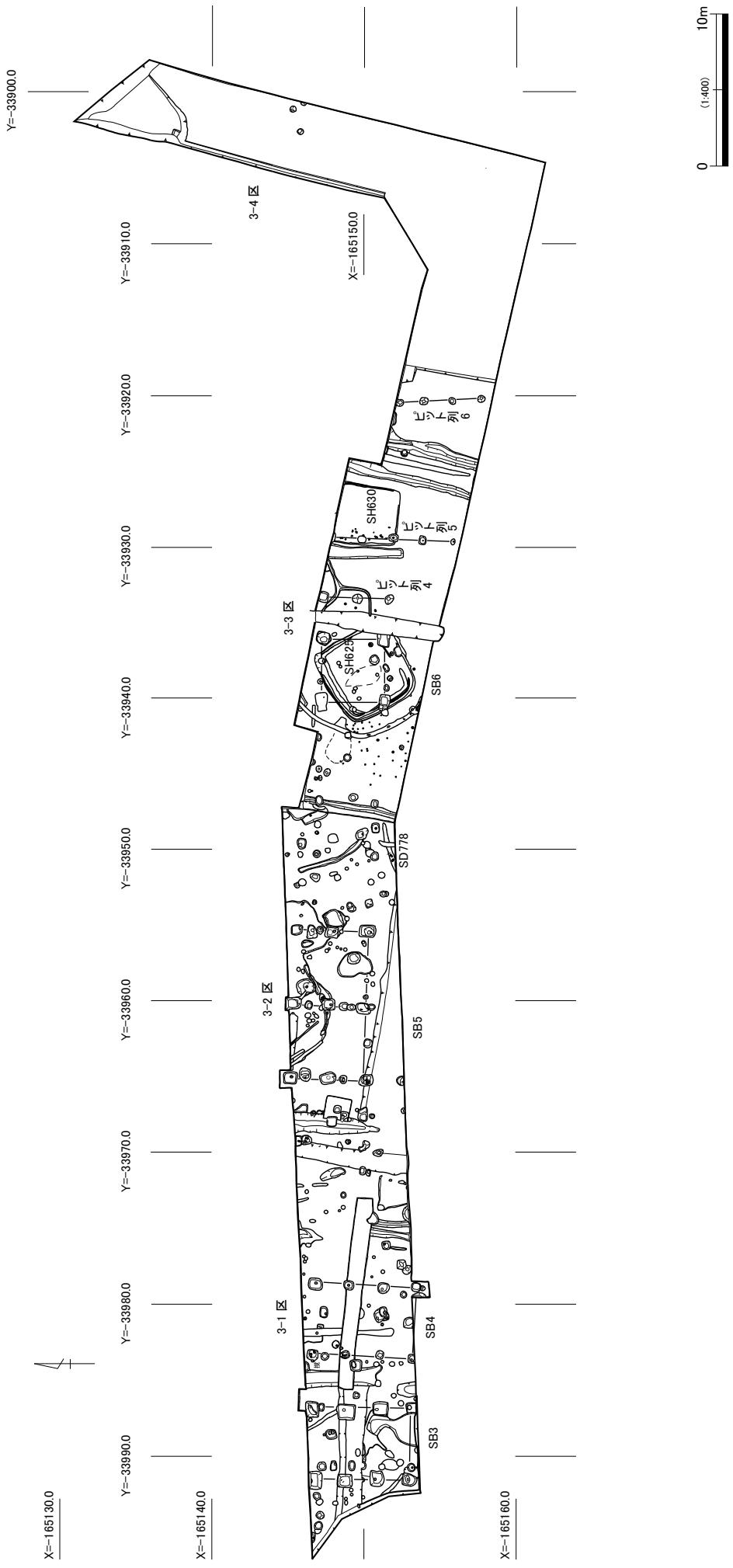


図 35 3 区全体平面図 (S=1/400)

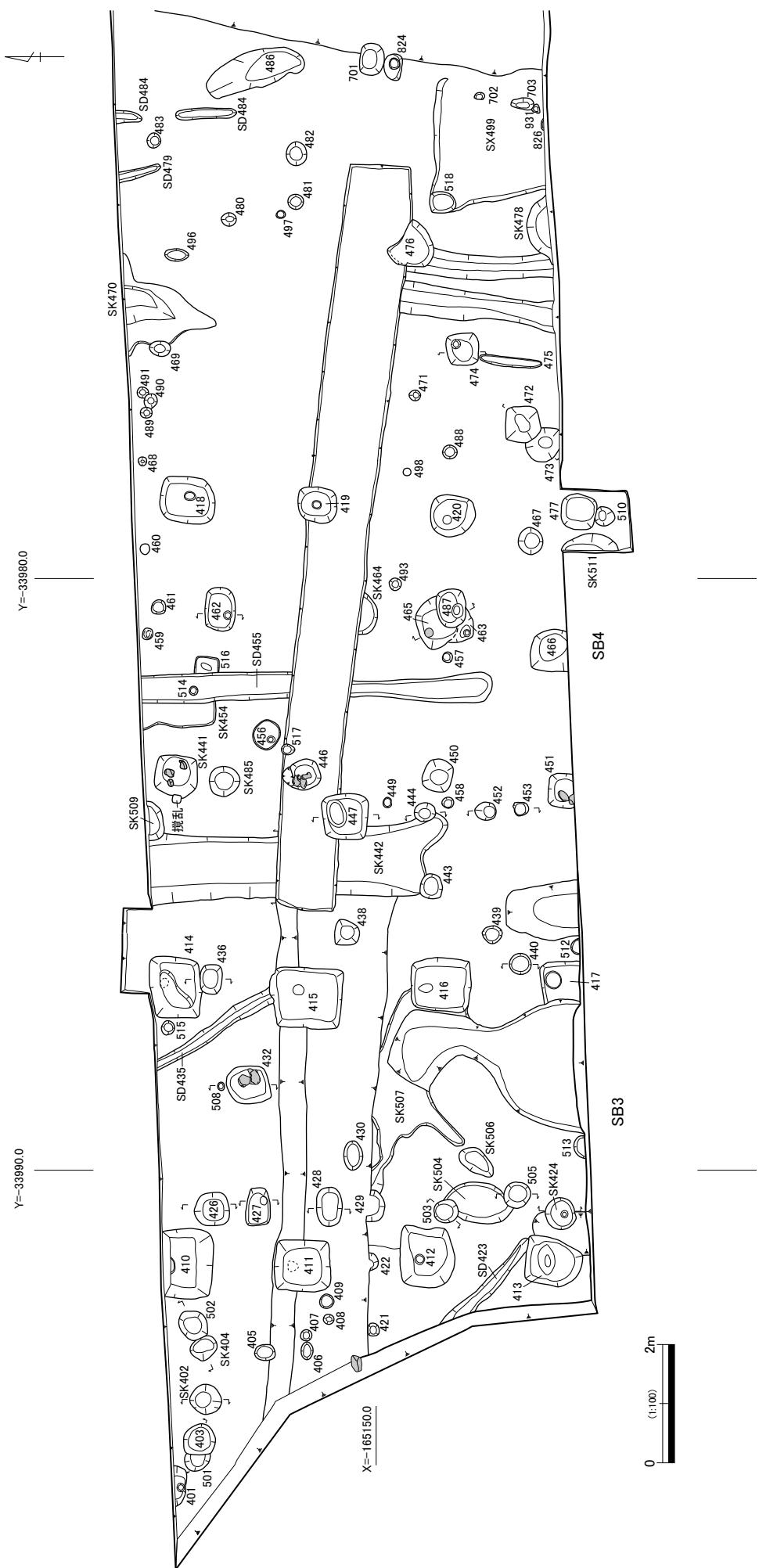


図 3-1 区平面図 (S=1/100)

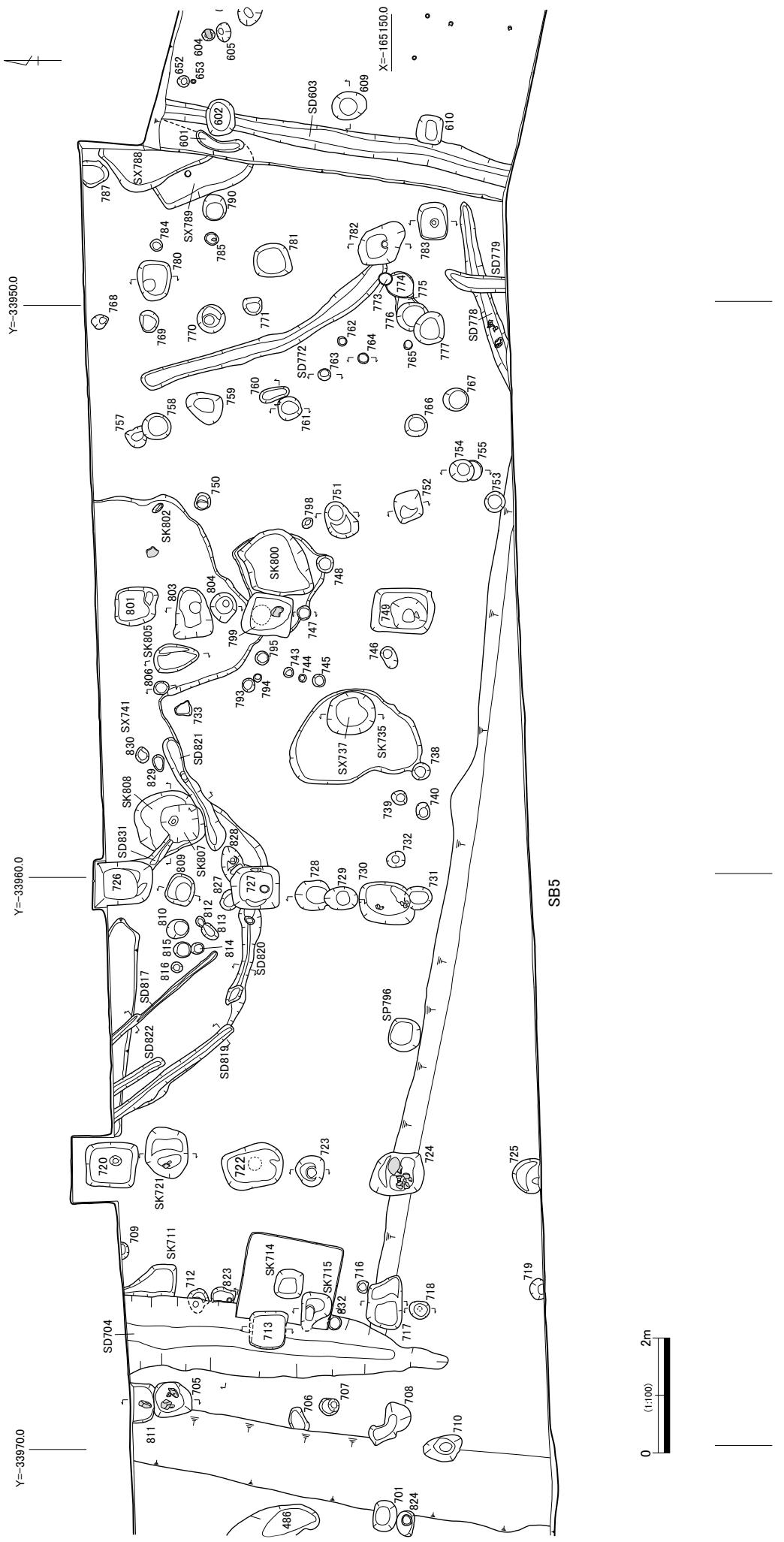


図 3-2 区平面図 (S=1/100)

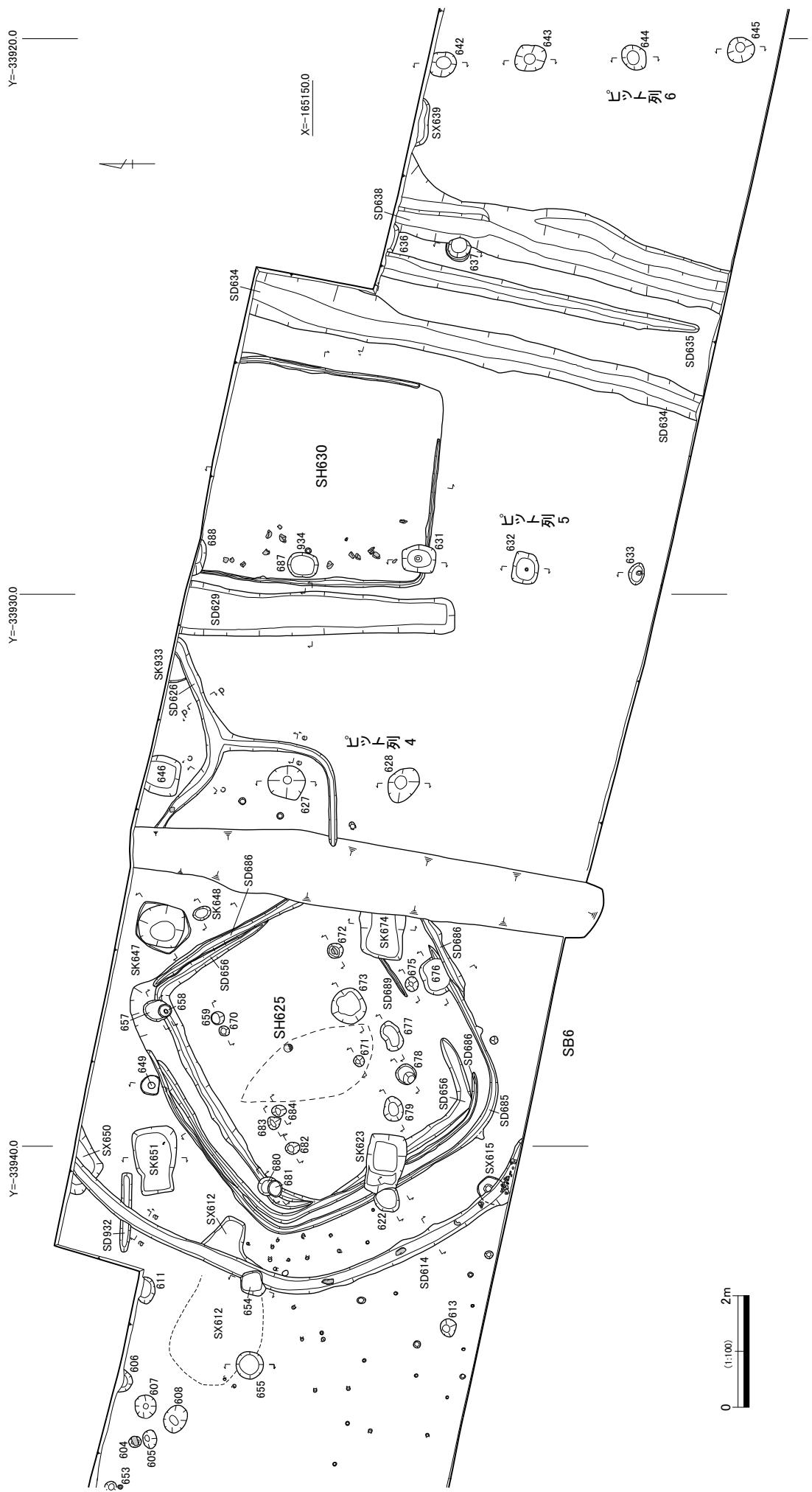
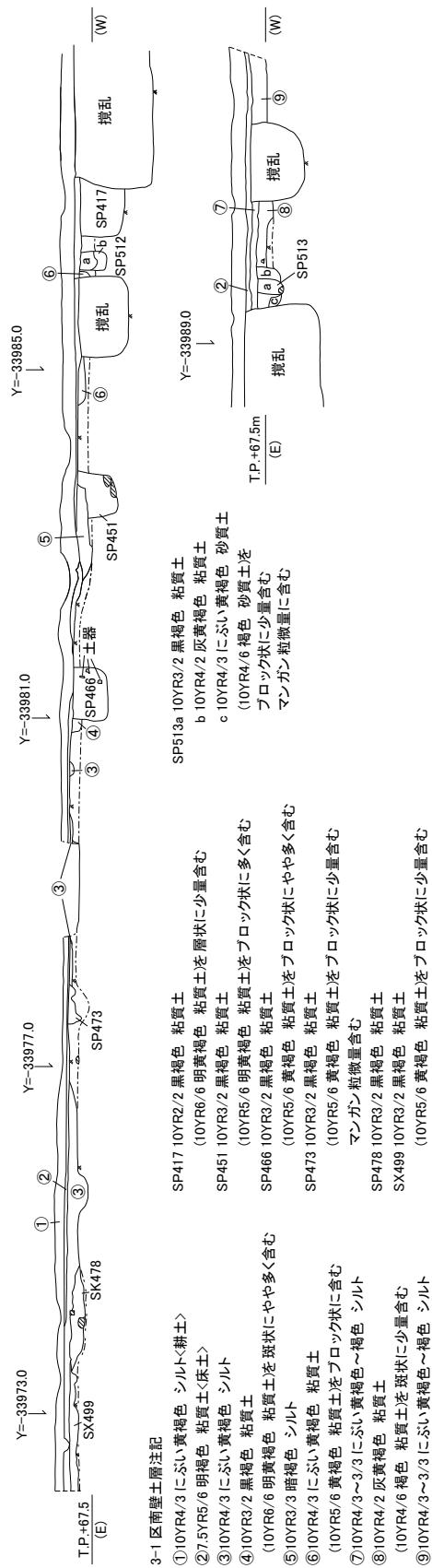


図 38 3-3 区平面図 (S=1/100)

3-1 区南壁



3-1 区北壁

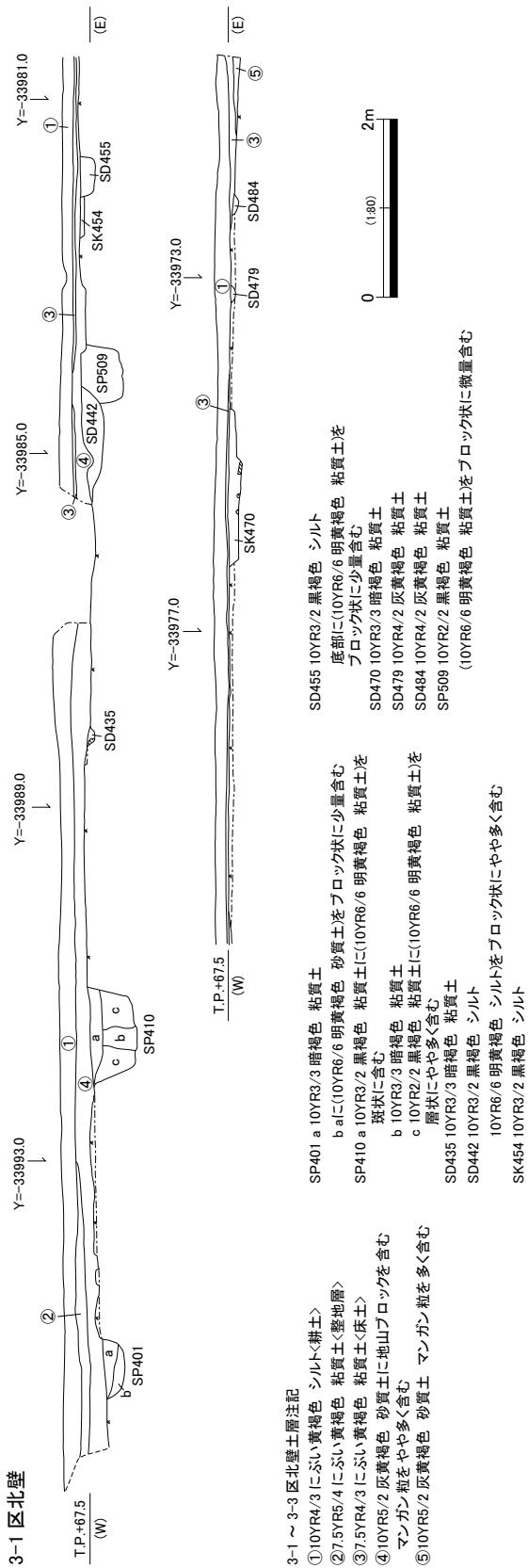


図 39 3-1 区南壁・北壁土層断面図 (S=1/80)

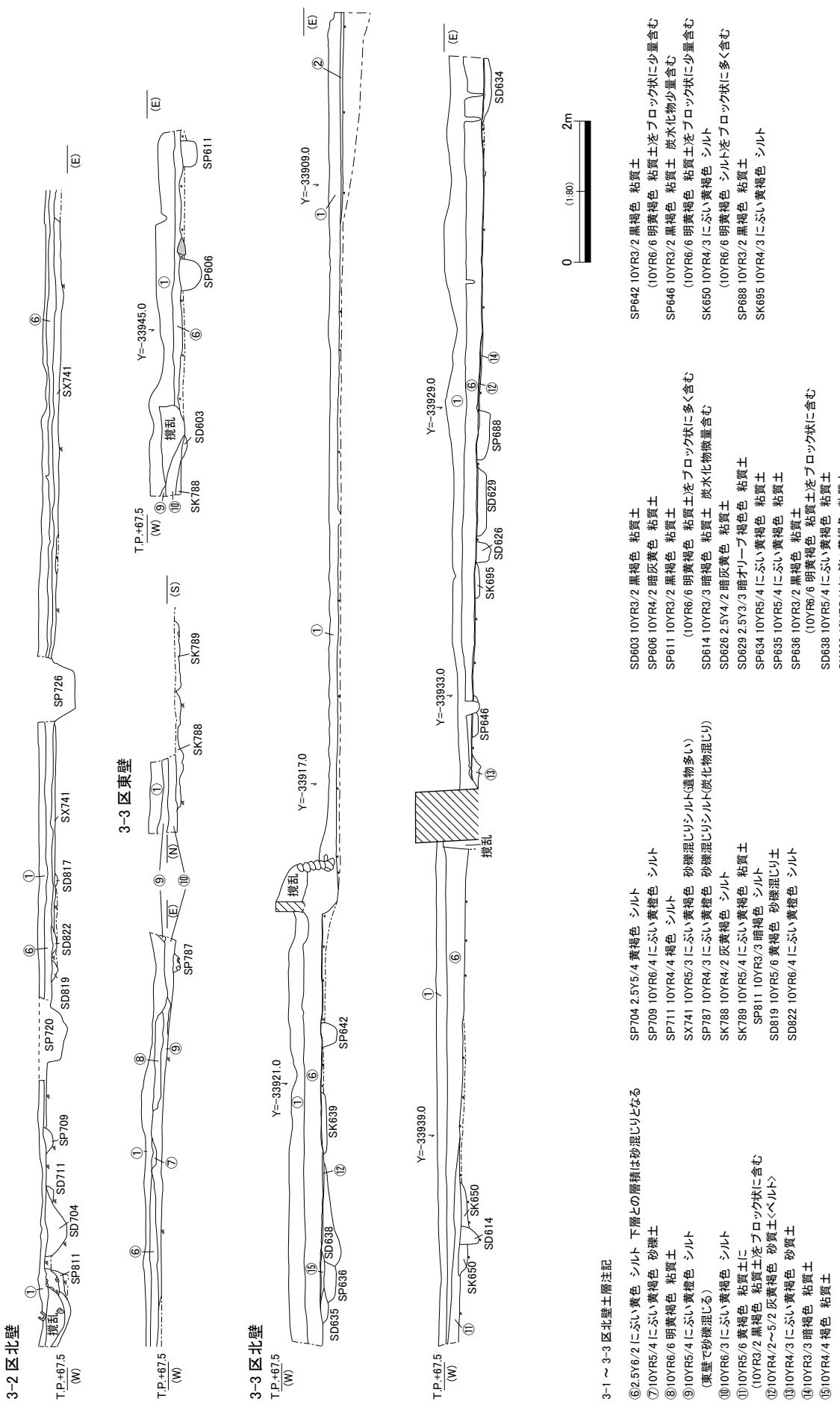


図40 3-2区北壁・東壁、3-3区北壁土層断面図(S=1/80)

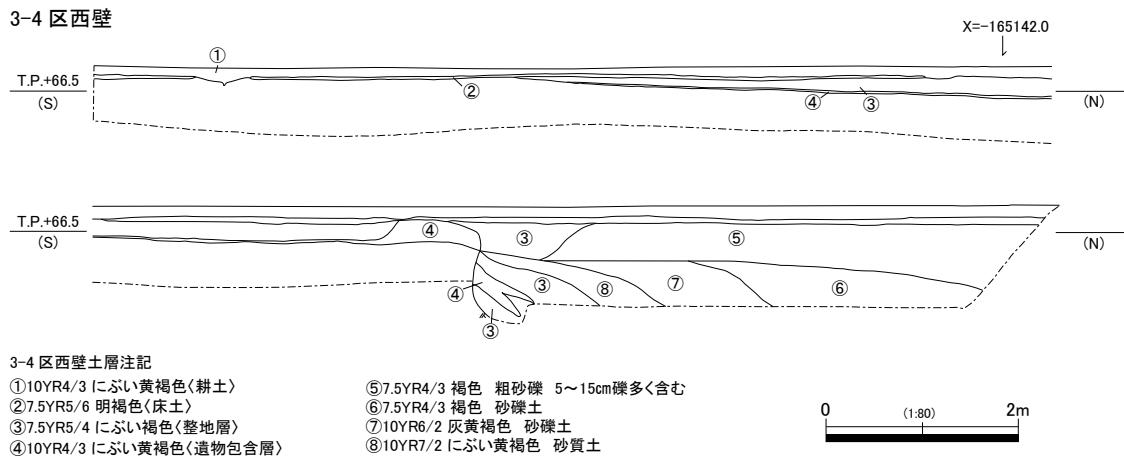


図 41 3-4 区西壁土層断面図 (S=1/80)

溝を検出してないため、規模は北東辺と南西辺の（SD686）を延長した推定値とし、南西—北東 5.2m、北西—南東 4.8m を測る。長方形のプランである。

SD694 最も外側で、北西、南西、南東辺までめぐる。北東辺を欠くが、北西辺からの落ちが（SD686）のラインに続くため、それ以東には拡張しないものと思われる。規模は一辺 5.5m で、ほぼ正方形のプランになる。

また南東辺で最も内側にある SD689 や、前述した SD694 を切る南東辺（SD686）を壁溝の一部と考えるならば、さらに 2 棟が重複していたと捉えることもできるが、削平のため明らかではない。

柱穴 SP659、672、678、682 を主柱穴に想定できる（図 42、43）。検出面からの深さは 40 ~ 50cm で、T.P.+66.8m 前後に柱穴の底面がある。SP672 は敷石によって底面のレベルをそろえる。やや北西に偏った位置にあるため、SD656 か SD686 のいずれかに伴うものと思われる。

そのほか建物内にある SP670、671、683、684 や、SD656 上のやや浅く大きい SP657、658、680、681 等も柱穴と考えられるが、南東側で構造的に組み合うピットを検出できない。最大でも 15 cm ほどしか深さのない SP673、676、677、679 といった浅い円形のピット（図 43）があるのみである。

炉跡 壁穴建物内やや北西に偏って、炭化物を多く含む黒色シルト（図 42 — ②層）が約 2.6m × 1.2m の範囲で紡錘形状に広がるのを確認した。遺構というよりも皿状の浅いくぼみで、最も深い中央でも層厚 10cm ほどしかない。一部焼土も確認でき、床面は焼けていないが SH625 に伴う炉跡として考えたい。

②層は、その下に水平堆積する搅拌された黒褐色粘質土（④層）を切って堆積する。この炉跡を最も新しい SD694 に伴うものとすれば、④層は前時期の埋土、もしくは建替え時の整地によるものと考えられる。なお、②層堆積部分の東寄りで 10cm 大の礫と弥生土器底部片を検出している（図 44、図版 11）。礫は自然礫で、煤等も付着していない。この礫等が炉に関連するものかどうかは不明である。

SD614 SH625 の西側を囲むように弧状にめぐる断面逆台形の溝である。幅約 30cm、深さ 20 ~ 30cm。底面のレベルは T.P.+67.0m 強でほぼ一定。壁溝との接続はないが、排水溝もしくは区画溝として捉えたい。溝南端ではやや溝幅が広くなり、10 ~ 20cm 大の礫が固まって検出された（図 44、図版 11）。そこからやや北へ離れて、弥生土器の壺頸部（図 46 — 176）と高杯脚部（195）が出土している。据え置かれたような状況ではない。

SD626 SH625 の東側で「Y」字状になる溝。幅 15 ~ 30cm 程度で、深さ約 20cm、底面のレベルは T.P.+66.8m 前後。攪乱によって推測となるが、SH625 の東隅で壁溝に接続し排水溝として機能したと

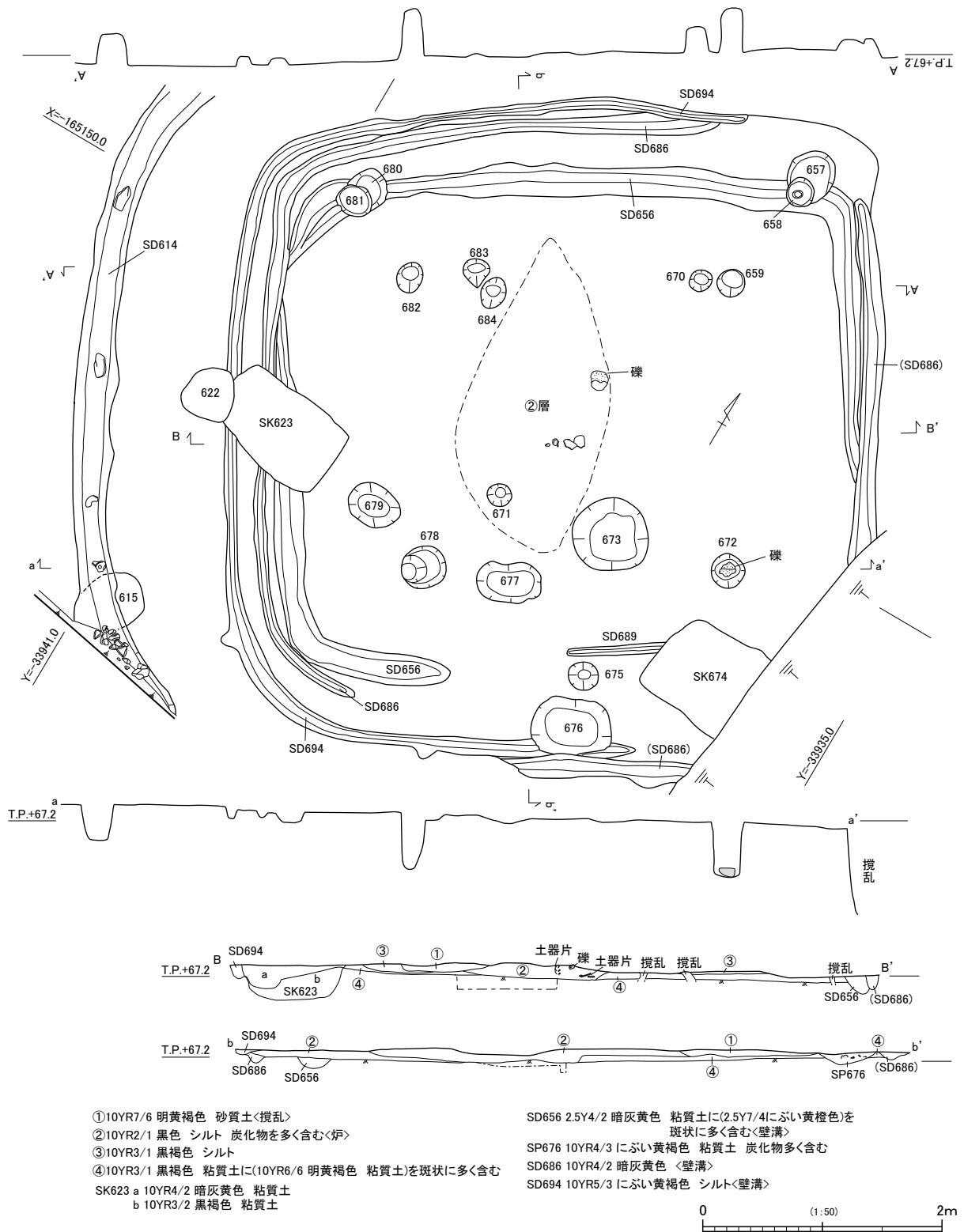
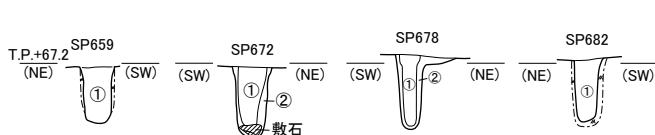


図 42 3-3 区 SH625 平面・断面・土層断面図 (S=1/50)

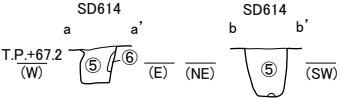
思われる。

溝の分岐部分では、20cm大の礫と弥生土器底部（図 46 – 190）、高杯脚部（197）を検出している（図 44、図版 11）。SD614 と同じく据え置いたような状況ではなく、廃絶時に流入したものと思われる。

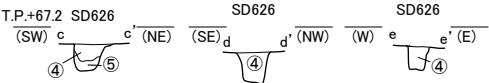
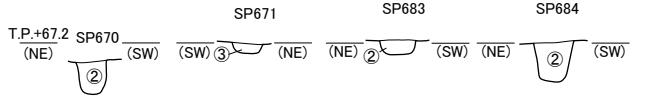
SH625 内柱穴



周溝



排水溝



①10YR2/3 黒褐色 粘質土
 ②10YR3/2 黒褐色 粘質土
 (10YR6/6 明黄褐色)をブロック状に多く含む
 ③10YR3/2 黒褐色 粘質土
 ④10YR4/2 灰黄褐色 粘質土
 ⑤10YR3/3 暗褐色 粘質土 炭化物微量含む
 ⑥10YR7/6 明黄褐色 粘質土

SH625 内ピット

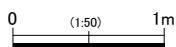
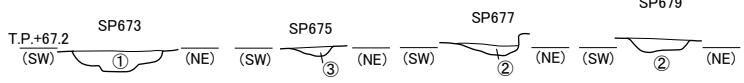


図 43 3-3 区 SH625 柱穴・ピット・SD614,626 土層断面図 (S=1/50)

遺物 SH625 埋土からは弥生土器片のほか、サヌカイト片 2 片、磨石 1 点、須恵器片 7 片が出土した。

図 46 – 172 ~ 174、182 は平面検出時に、178 ~ 180、183 ~ 185、198 はベルト設定後、埋土から出土したものである。172、173 は広口壺口縁。172 は端部を上下に肥厚させた後、下端部に刻み目を施す。173 は粘土帯の継ぎ目で上端を欠くが、端面には凹線 3 条と竹管文が残る。174 は大形の広口長頸壺。上下に肥厚した口縁端面を擬凹線と円形浮文で、上面をクシ描き波状文で飾る。一部ミガキも見られる。胎土には角閃石と雲母を含む。178 ~ 180 は甕口縁部。178 は外反して端部を丸くおさめる。生駒山西麓産か。179 はやや内湾気味にのび、端部を上方へつまみあげる。内面は黒変する。180 は体部から口縁部半ばにかけて黒変するため甕とした。頸部は内面に粘土帯の段を残して接合され、口縁外湾して受口状に上方につまみ出される。上端には細かな刻み目が施される。外面は浅黄色を呈し、胎土にはチャートやごく細かな長石が含まれる。183 ~ 185 は壺・甕の底部。182 外面はナデ、内面はクモの巣状の簾状ハケ調整。胎土は精良。底部に指跡がめぐる。ドーナツ状の底をもつ 183 は外面に粗いハケ痕跡を残す。184 は風化のため不明瞭だが、おそらくドーナツ状の底を呈する。185 は台付鉢もしくは甕。高台をつまみ出し、内面には簾状ハケ調整。全体が赤変する。

壁溝である SD656 からは、甕口縁部 177 が出土している。端部はわずかに下方に肥厚する。ほか焼土塊とサヌカイト剥片も出土している。

同じく壁溝 SD685 で出土したのは 181。椀もしくは高杯で、内湾しながら上方へのび、端部は丸い。

竪穴建物の西をめぐる SD614 からは 175、176、188、189、193 ~ 196 が出土している。175 は広口壺口縁。端部はわずかに肥厚して面をなす。短頸壺 176 の口縁部は、小さく外傾して内湾気味。内外面はミガキ調整と思われるが不明瞭である。193 は高杯。杯部が屈曲する形式のものと思われる。

円形竹管浮文と、不明瞭ながらも凹線も認められる。杯の屈曲部にも円形竹管浮文がみられる。蓋に転用したのか内面に煤が付着し、内外面とも風化が著しい。胎土に角閃石と雲母を含む生駒山西麓産。194 も高杯。杯部は浅く、屈曲部にわずかに突起状の貼り出しをもつ。口縁は長く外反してのび、端部は丸くおさめる。195 は脚部。低平で裾部はわずかに広がり、端部で肥厚して面をなす。ほぼ全周が残るため透かし孔はないものと確認できる。高杯もしくは台付壺か。196 は高杯脚部。裾部へなだら

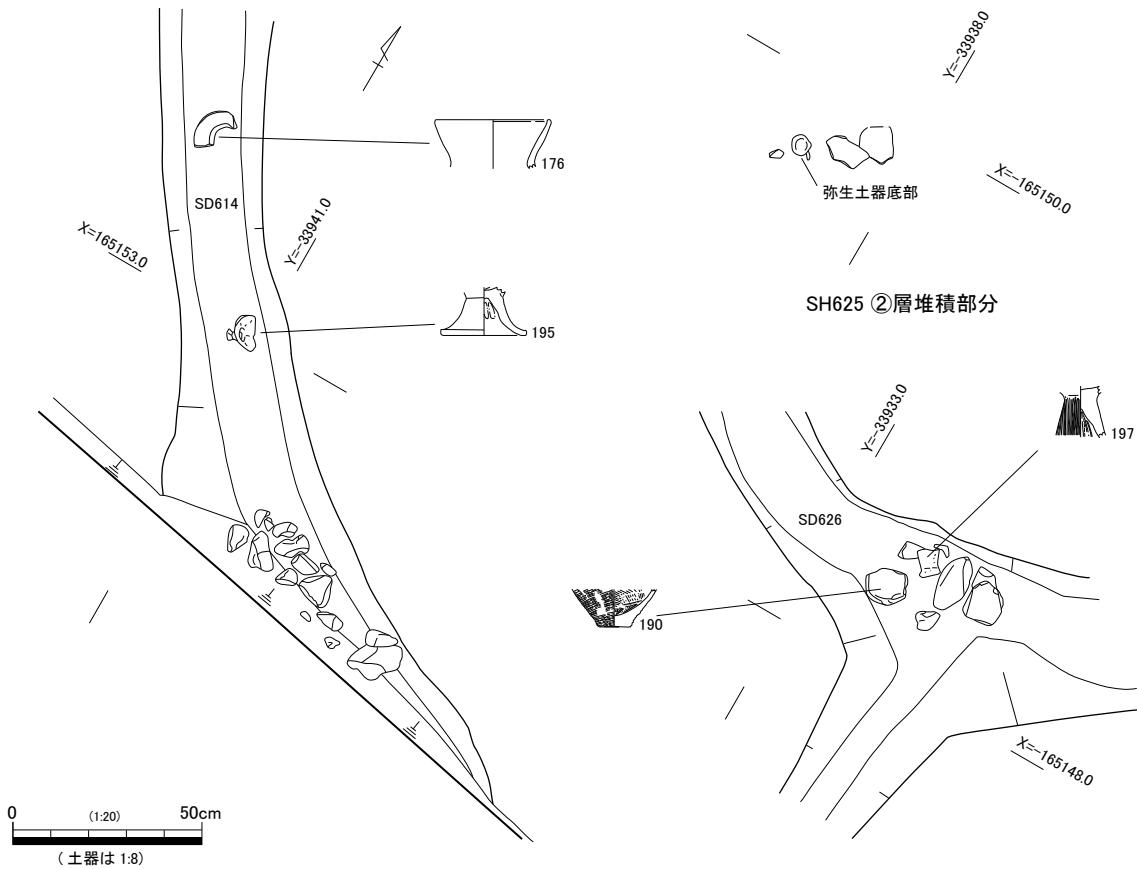


図 44 3-3 区 SH625,SD614,626 遺物・礫検出状況平面図 (S=1/20)

かにのびるものであろう。

排水溝 SD626 出土の 197 は高杯脚部。外面に細かいミガキ調整。基部は中実化しあげている。

186 は SP676、187 は SP673、188、189 は SD614、190～192 は SD626 から出土したものである。186 は外面赤変。角閃石と雲母を含む。生駒山西麓産。187 は外面赤変し、底部内面は黒変する。内面に粗いハケを垂直方向に施す。189 の底部は SD614 磐周辺から出土した。外面と底面はミガキ調整で、内面は簾状ハケ調整。壺か。190 も内面簾状ハケ。191 は外面赤変。192 は焼成後、底部に穿孔している。

出土した弥生土器はほとんどが小片で、個別の壁溝ごとに時期差は抽出できない。加飾広口壺 173・174 や、受口状の口縁をもつ甕 180、口縁部が長く外反する高杯 193・194 といった様相を特徴的なものとして捉えると、V 様式後葉から VI 様式をその中心に据えるものであり、その期間にわたって数度の建替えが行われたものと考えられる。

ほか SH625 埋土から土師器高杯（198）と須恵器杯（199～202）が出土している。数点の出土で後述する掘立柱建物等に関連する遺物と考えられる。198 は土師器、高杯脚部。SH625 埋土出土。基部は中実化している。199 は杯蓋の端部である。201、202 は杯身。立ち上がりは短く内傾し端部はまるい。いずれも MT85～TK209 型式期のものであろう。200 は杯蓋。端部を下方に折り曲げるもので、平城 I～II 段階に位置付けられる。

SH630 SH625 の東で、現代耕作土を除去した状況で方形プランを検出した（図 45、図版 12）。幅 10cm 弱、深いところでも深さ 10cm 弱の壁溝が残る程度で、残存状況は悪い。埋土はほぼないと言ってよく、地盤層に痕跡が残る程度である。規模は東西 4.0m、南北 4.0m 以上を測り、建物の軸は、南北からやや東に振って N-5°-E。柱穴、炉跡は確認できない。SP687 や SP934 は建物内にあるが、建

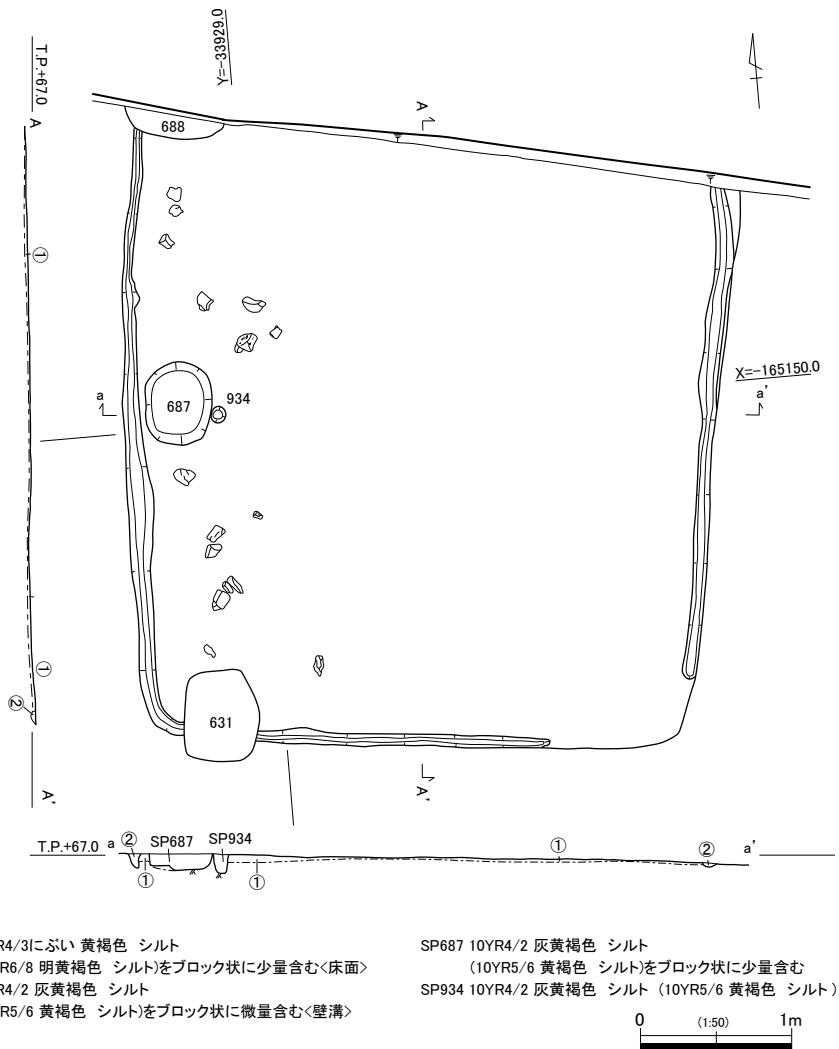


図 45 3-3 区 SH630 平面・土層断面図 (S=1/50)

物の残存状況から SH630 に伴うものではないと考えられる。西側壁溝沿いに拳大の礫が集中するものの、地盤層に含まれる礫が表出したものと考えられる。

出土遺物はわずかで小片である。遺構検出中と、壁溝埋土中から弥生土器片のほか、サヌカイト剥片と須恵器片数点が出土している。検出中の出土遺物には薄手で受口状口縁をもつ甕や、タタキもしくは粗いハケ調整のある破片などがある。小片のため実測はしていない。時期を確定する資料には恵まれないが、遺跡全体での竪穴建物の時期を考慮すれば、あえて SH625 と離れた時期を想定する必要はなかろう。SH625 と同時併存するかどうかは不明だが、3 区全体で出土した弥生土器に大きく時期差のあるものではなく、V 様式後葉から VI 様式のうちにおさまるものと考える。

図 46-203 は、SH630 の南西部から出土した須恵器杯身である。SH625 と同じく、後述する掘立柱建物等に伴うものと考えておきたい。

(2) 溝状遺構 (図 47、48、図版 13)

SD778 3-2 区南東隅で最大で幅 32cm、深さ約 11cm を測る溝をほぼ耕土直下で検出した (図 47、図版 13)。東北東へやや弧を描いて延びる溝で、底面がやや平らな「U」字形の断面をもち、明確な底面をもつ SH625 の壁溝などとは異なる。埋土は 1 層で、暗褐色粘質土に地山由来と思われる黄褐色土

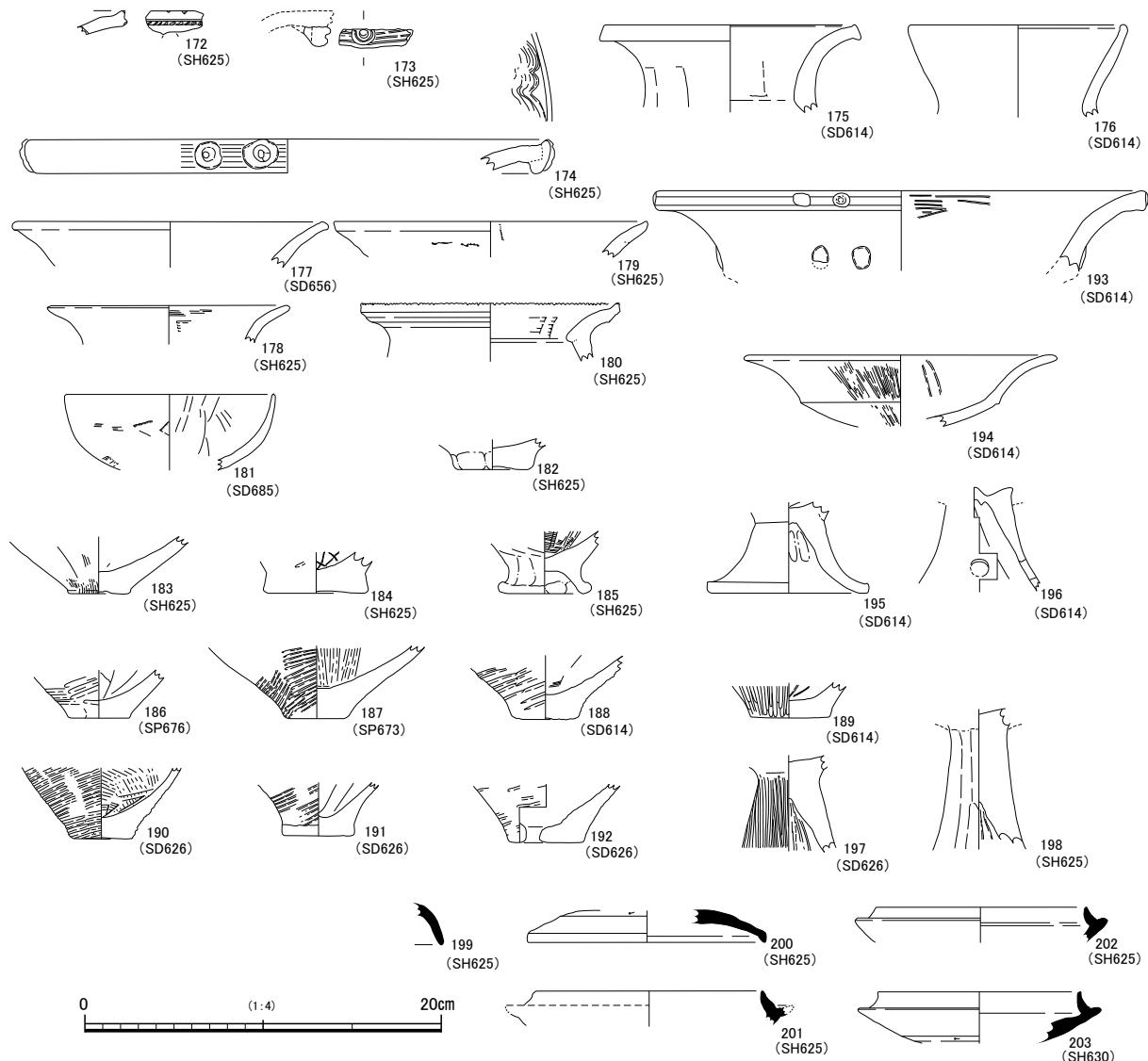


図 46 3-3 区 SH625,SD614,626,656,685,SP673,676,SH630 出土遺物実測図 (S=1/4)

が混じる。溝は南の調査区外へと延びて全体形は不明だが、集落域の広がりを考慮すると SH625 と同様な竪穴建物に関連するものか。

溝埋土、ほぼ遺構検出面直下で、弥生土器壺（204）と甕（206）が形を保って出土した（図 47、図版 13）。204 はほぼ正位、206 は横位で出土している。上層の削平に伴って土器も破損している。また手焙形土器（205）は、南壁断面にかかる集中して出土している。これらの遺物は埋土上位で比較的形を保ったまま出土しており、埋土堆積後流入したものと思われる。廃絶の時期を示すものとして重要なである。そのほか弥生土器片と、須恵器杯蓋 1 点が出土している。

図 48 – 204 は壺の体部で、頸部との境は明確な屈曲をもつ。胎土は白色が強く、長石が目立つ。内面は黒変する。205 は手焙形土器の鉢部。刻目突帯は最大径より下がった位置に付き、大きめの底部をもつ。内外面ともハケ調整。外面には煤付着。68・69 年度調査でも 2 個体出土している。206 は受口状口縁をもった甕。口縁端部に面をもち、口縁部と体部の屈曲部は明確な稜をもつ。肩部で張らず中半近くで最大径をもつものと思われる。外面のタタキは細く、一部にケズリ状のハケ調整が施される。207 は器台の体部。透かし孔が 1 孔のみ残る。外面ミガキ調整。208 は須恵器杯蓋。TK43 ~ TK209

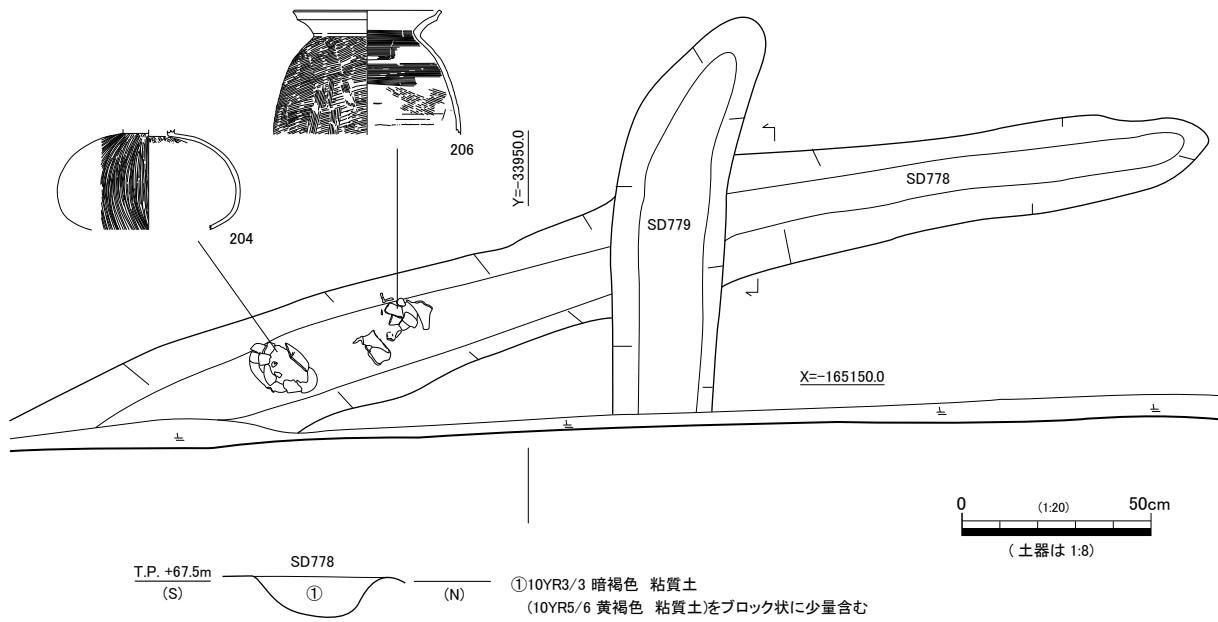


図 47 3-2 区 SD778 遺物出土状況図 (S=1/20)

型式期か。ごく小片であり、流入したものであろう。以上、SD778 出土の弥生土器は手焙形土器 205 を特徴としてVI様式に位置づけられ、この時期に廃絶されたものと思われる。

SD779 3-2 区南東隅、SD778 を切って南北に走る溝（図 47）。幅、深さとも SD788 とほぼ同じ。出土遺物は弥生土器のみで、SD788 廃絶後、さほど時を置かずに掘削されたものであろう。

図 48-209 は内湾する形態から、屈曲した口縁をもつ鉢と考える。ただし、外面は黒変、器面は剥離するなど被熱の痕跡があり、甕の可能性もある。

SD772 前述した SD778、779 の北で北西から南東に走る溝（図 37）。幅 3.4m 前後、深さ 10cm 弱で、前述の溝よりやや浅い。弥生土器片が出土した。図 48-210 は甕。口縁端部に刻み目が施される。211 は甕の底部。焼成後に穿孔されている。212 は高杯の裾部か。内外面ハケ調整で、端部はわずかに面をもつ。裾にそって内外面とも黒変しており、蓋として転用された可能性がある。V 様式後半から VI 様式に位置付けられ、SD778 や SD779 に近い時期のものであろう。

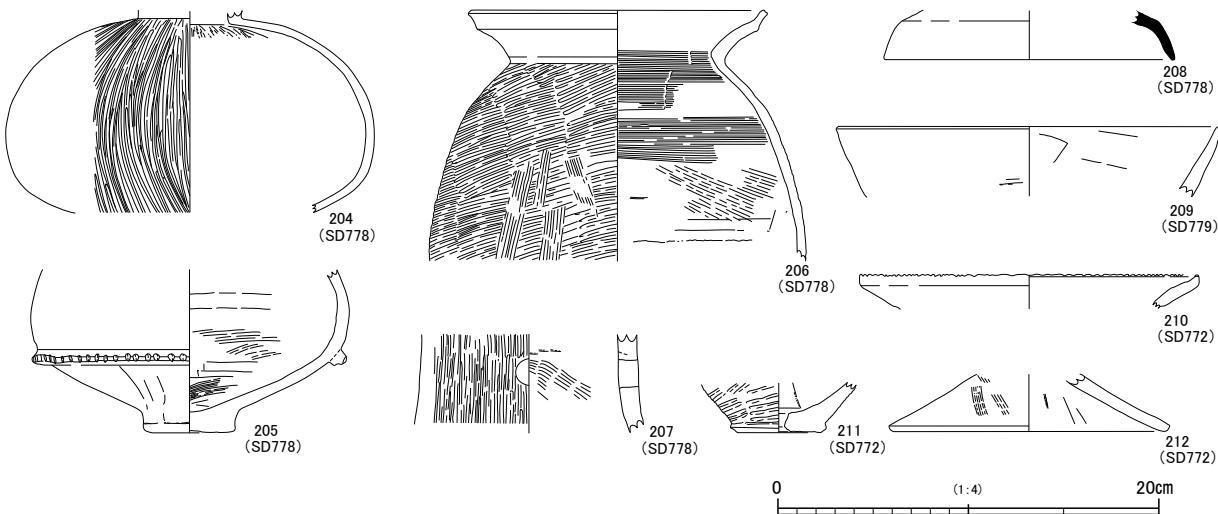


図 48 3-2 区 SD778,779,772 出土遺物実測図 (S=1/4)

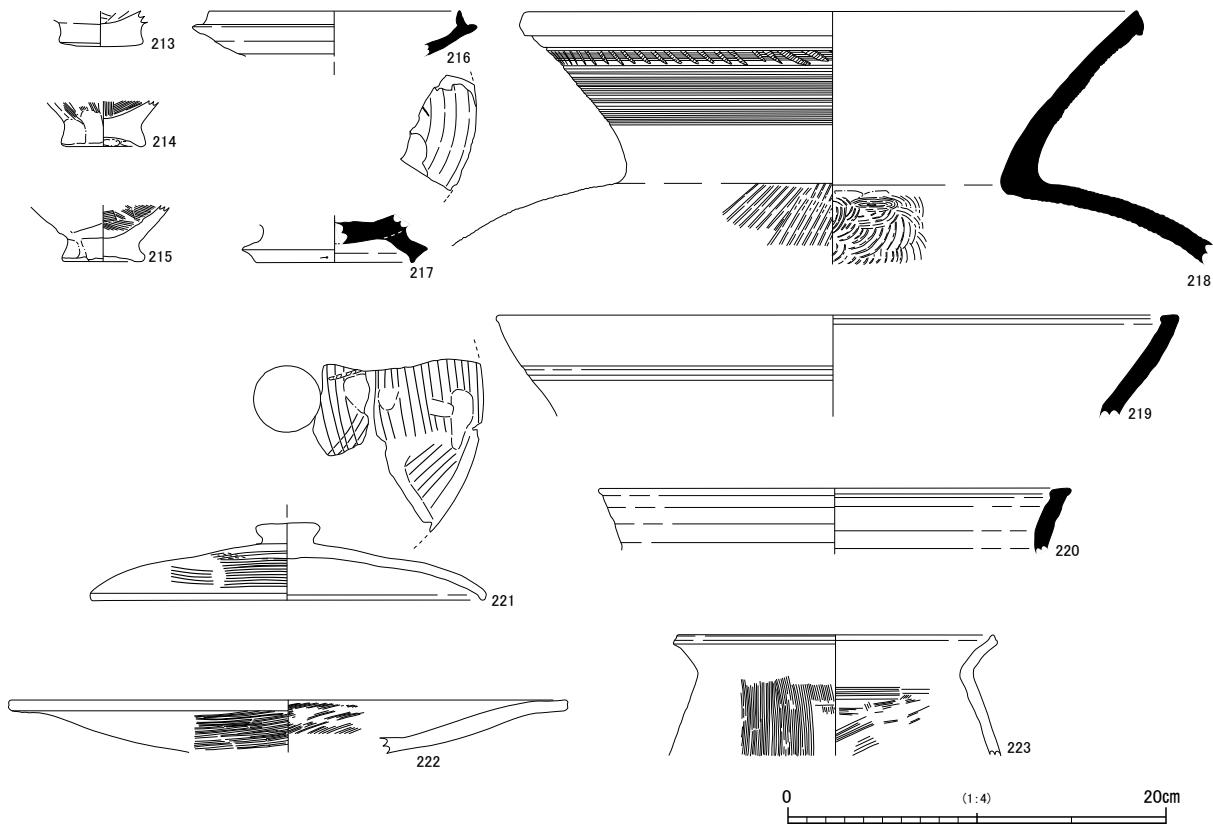


図 49 3-2 区 SX741 出土遺物実測図 (S=1/4)

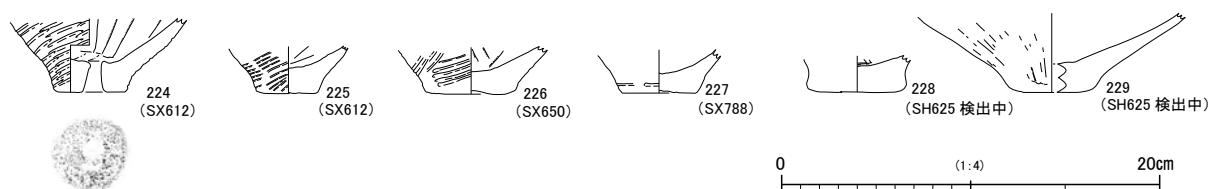


図 50 3-2・3 区 SX612, 650, 788 出土遺物実測図 (S=1/4)

(3) 落ち込み状遺構 (図 37・40・49・50、図版 13)

SX741 3-2 区北辺中央で検出したごく浅い皿状の落ち込み (図 37、40)。深さ 10cm未満で浅く不定形に広がり、砂礫混じりの黄褐色シルトが堆積する。遺構屈曲部での切り合い関係を平面や土層断面で検討したが、明確にできなかった。細い溝が、西側では北西—南東方向に並行して (SD817、819、822、831)、南側では遺構を区切るように弧状にはしる (SD820、821)。このうち SD820、821 内には深いピットも認められる。これらの溝を壁溝とする竪穴建物の可能性も考えたが、一連に続くものではなく東側へも延びないことから竪穴建物とはしていない。

遺物は比較的多く出土している。図 49 には遺物の残りが良かったため須恵器、土師器を中心に図示しているが、弥生土器片が約 8 割と大半を占め、須恵器片、土師器片はそれぞれ 1 割弱、ほかサヌカイト剥片 4 片が出土している。213～215 は弥生土器底部。いずれも内面は簾状ハケ調整。214、215 は台状にひねり出している。216～220 は須恵器。216 は杯。端部は短く内傾し丸くおさめる。外面には一部ヘラ描きの線が見られる。217 は壺の脚台部であろう。「ハ」の字状にやや長めに開き、内端部で接地する。218 は須恵器壺。頸部上半にはカキ目がめぐり、その上に一列の列点文。端部は断面三角形を呈する。219 も須恵器壺。口縁は内湾し端部は面をなす。外面には凹線がめぐる。220 は短頸壺か。

頸部は成形時の段をもちながら外傾して内傾する面をもつ。須恵器壺類は TK43～TK217 型式期におさまるものであろう。

221～223 は土師器。221 は蓋。暗文は分割して施され、口縁端部はわずかに内湾して外面に稜をもつ。平城Ⅲ～V 段階。222 は土師器高杯の杯部。口縁は水平にのびる。223 は甕。口縁端部は上方にわずかにつまみ出される。内外面ともにハケ調整。飛鳥 V 段階か。これら古代の遺物は SX741 を切って存在する掘立柱建物やピットに伴う可能性が高い。

そのほか弥生時代と考えられる遺構として、SD614 に切られる SX612、615、650、SD932、出土遺物と埋土から想定される SX788、789 がある。

SX612 3－3 区で竪穴建物排水溝 SD614 に切られる（図 38）。ごく浅い落ち込みで、明確な遺構のラインを形成しないが、弥生土器が出土している。図 50－224、225 は弥生土器底部。いずれも外面はタタキ調整、内面は簾状ハケ調整。224 は焼成前に底部穿孔が施される。

SX615 SD614 の南端に切られる土坑（図 38）。土坑内に直径約 10cm の小穴がある。出土遺物なし。

SX650 3－3 区で SD614 に切られる土坑（図 38）。図 50－226 の弥生土器底部のほか小片が出土。

SX788、799 3－2、3 区にまたがる不定形の土坑で、SX789 を SX788 が切る（図 37）。遺構底面は凹凸があり、土層断面で観察できる壁の立ち上がりは明確である（図 40 3－2 区北・東壁）。埋土が SH625 を構成する壁溝や柱穴と類似しており（灰黄褐～にぶい黄褐色）、弥生土器小片とタタキ調整のある底部（図 50－227）が出土していることから、弥生時代後期に所属するものと考える。

SD932 3－3 区で SD614 に切られ、東西方向に短く伸びる幅 18cm、深さ 5cm 未満の浅く細い溝（図 38）。出土遺物なし。

また 3－3 区 SH625 の上層で、明確な遺構ラインを追えなかった落ち込みがあり、その検出中に弥生土器が出土している。包含層出土とすべきかもしれない。図 50－228、229 は弥生土器底部。外面ハケ調整でいずれも V 様式に位置づけられる。

（4）掘立柱建物（図 51～57、図版 8・9・14）

SB3 3－1 区で検出した SP410～417 からなる掘立柱建物（図 51）。建物方向は南北、調査区内では桁梁 3×1 間、6.5×4.7m、面積約 30.6m² 以上を測る。柱間距離は桁行で 2.1～2.2m、梁間で 4.7m。梁間柱間距離が長く、南辺中央の柱穴は、攪乱や後世の整地によって削平された可能性がある。柱穴掘りかたはややいびつなものもあるが長方形で、100×80cm 前後、深さは約 40cm。柱穴は北側に偏る。

掘りかたからは、それぞれ弥生土器片と須恵器片、サヌカイト剥片が出土している。図 52－230 は弥生土器甕の口縁部。外反する口縁は端部に面をもつ。231 は土師器高杯の口縁部。内外面風化のため調整不明。232 は須恵器杯蓋。復元口径 12.6cm、残存高 3.9cm。天井部は低く丸みをもち、回転ヘラケズリ調整が施される。口縁部端は丸い。焼成あまく、器面は灰白色を呈する。233 は須恵器杯身。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く鋭い。小片で口径は推定 10cm 前後。234 は須恵器の脚台部。丸みを帯びた段を形成し、接地面で面をなし端部は丸い。径は 8cm 前後と小さいものだろう。有蓋高杯か。特に須恵器杯から、下限を TK43～TK209 型式期に求めることができる。

そのほか SB3 周辺のピットから出土したものを図示する。235 は SP401 から出土した弥生土器底部。内面ハケ調整。236 は SP403 出土。弥生土器甕の底部で、内外面とも風化が著しい。ドーナツ状の底をもつ。外面はタタキ調整、内面ハケ調整。237 は SP456 出土。製塩土器の口縁部であろう。内外面

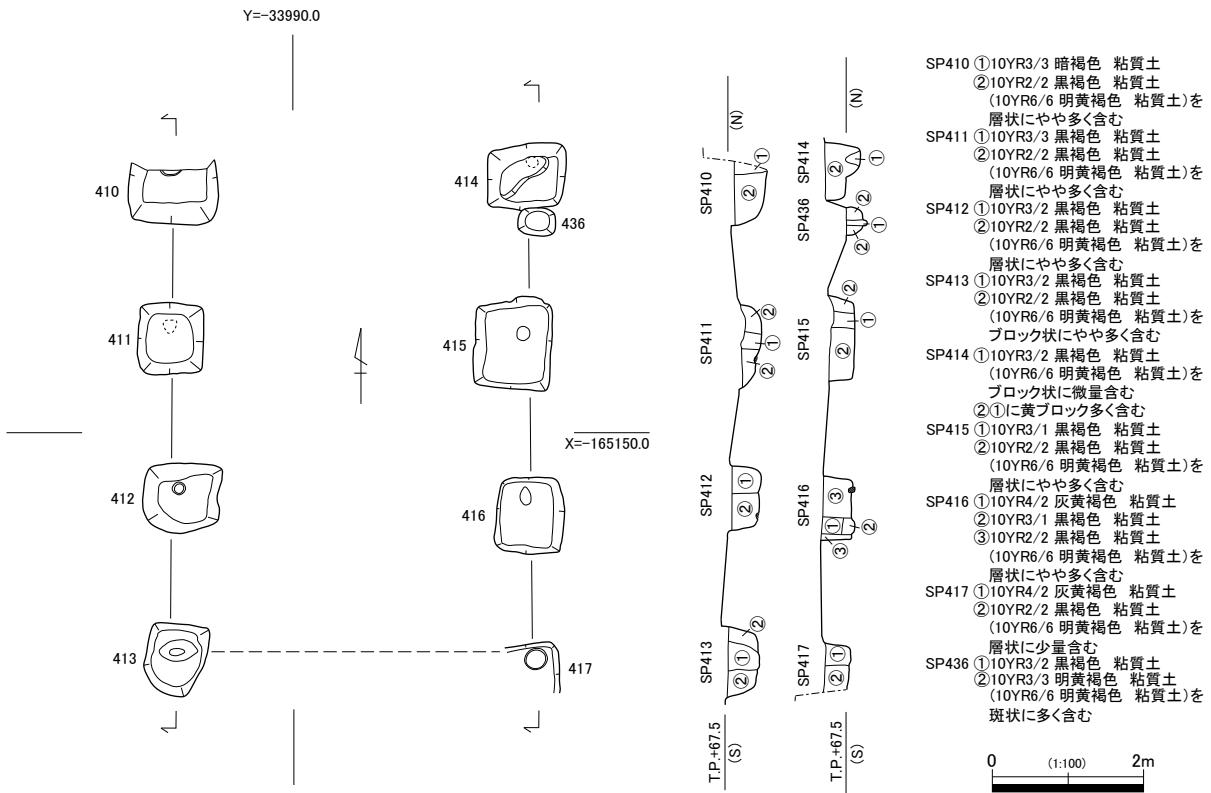


図 51 3-1 区 SB3 平面・土層断面図 (S=1/100)

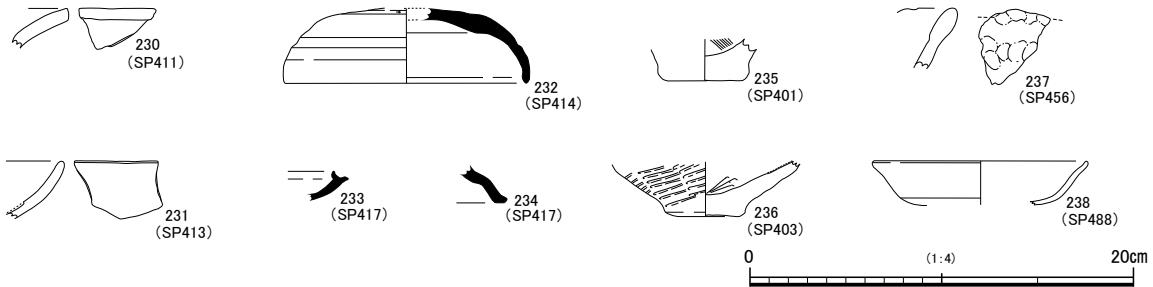


図 52 3-1 区 SB3 掘りかた・周辺ピット出土遺物実測図 (S=1/4)

ともに指押さえによる調整。胎土に 2mm 前後の礫を多く含み、器面は浅黄橙色を呈する。238 は SP488 から出土した。土師器杯もしくは皿。内外面ともに風化が著しい。体部下半は内湾し、上半で外湾して口縁端部はわずかに丸みを帯びる。復元口径 11.1cm、残存高 2.3cm。8 世紀代か。

SB4 3-1 区、SB3 の東に隣接する掘立柱建物（図 53）。SP418～420、441、446、450、451、466、477 から成る。SB3 と規模や方向をほぼ同じくするが掘りかたは小型。建物方向は N - 2° - E。調査区内での規模は桁梁 3 × 2 間、6.6 × 4.6m、面積 30.4m²以上。掘りかたは隅丸方形～円形で、小さいものでは 65 × 50cm 前後、SP418 が最大で約 95 × 70cm。深さは 40cm 前後だが、深いものでは 20cm 弱。柱穴痕跡は掘りかたのほぼ中央にある。柱間距離は桁行で 2.1～2.3m、梁間 2.3m を測る。

出土遺物は弥生土器片、須恵器片のほかサヌカイト剥片数点。SP441、451 からは内面に暗文をもつ黒色土器 A 類が出土しているが、小片のため図示していない。図 54-239～241 は SP419、242 は SP441、243、245 は SP418、244 は SP441、246 は SP420 から出土している。

239 は土師器甕。口縁内面はハケ調整。胎土に雲母と角閃石を含み生駒山西麓産かと思われる。240～243 は弥生土器底部。240 は底部復元径 3.3cm と小型。241 はドーナツ状の外底面。外面はわずか

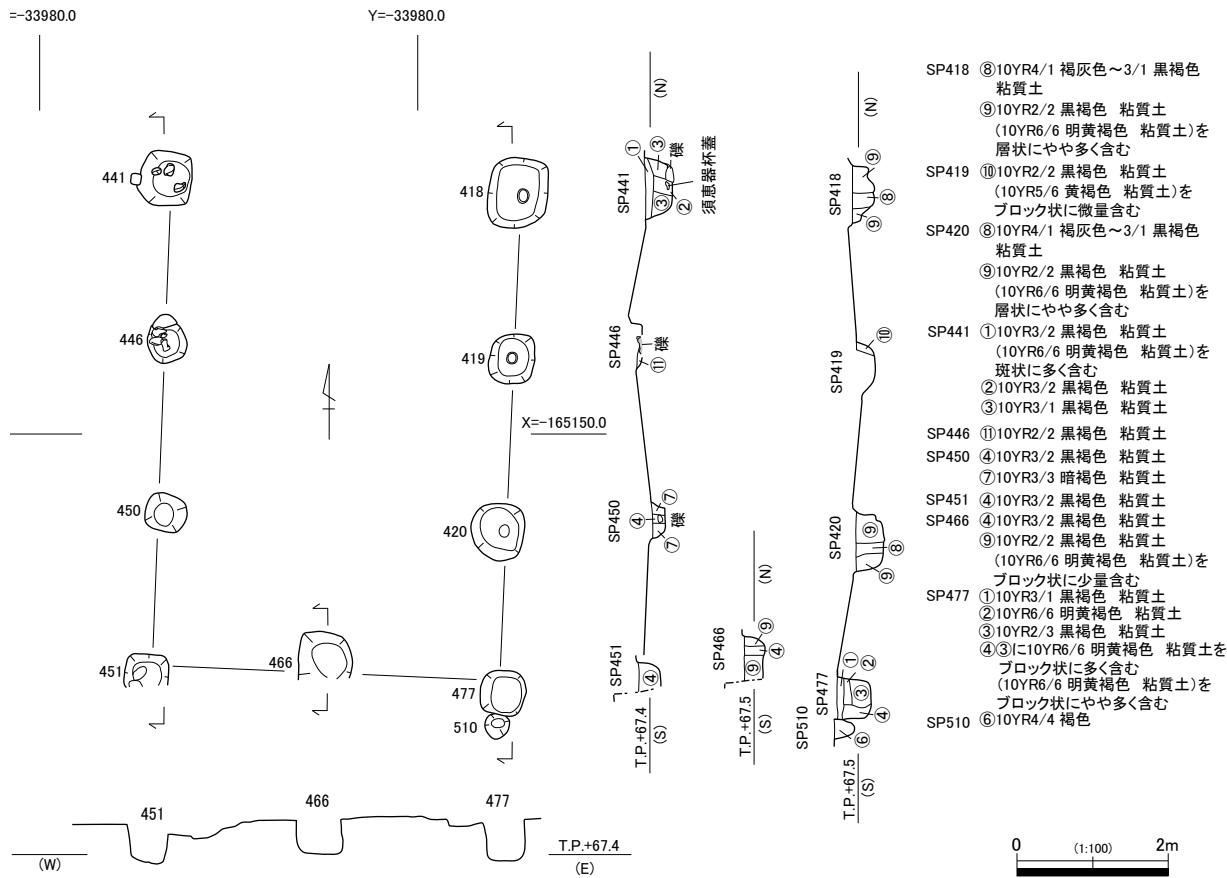


図 53 3-1 区 SB4 平面・土層断面図 (S=1/100)

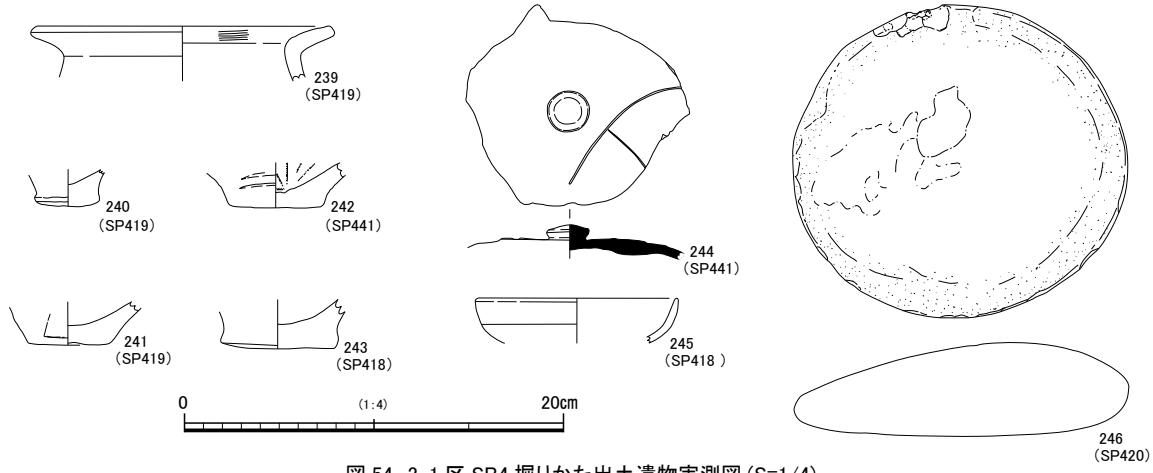


図 54 3-1 区 SB4 掘りかた出土遺物実測図 (S=1/4)

に工具の痕跡が残る。内面はナデ調整。242 は外面タタキ調整、内面は簾状ハケ調整。243 は外面にタタキ調整のような痕跡が見られるが風化のため不明瞭。244 は須恵器杯蓋。つまみは中央にやや高く扁平な山形となる。天井部に幅 1mm 前後のヘラ記号をもつ。天井部内面は直線ナデ。245 は土師器杯。内外面風化して調整不明。

246 は円形の礫で、縁辺部には敲打痕が認められる。直径 16.5 ~ 17.7 cm。扁平な円形だが、上下面ともに不安定で据え置けない。石材は砂岩か。

SB5 3-2 区で検出した SP720、722、724、726、727、730、749、796、799、801 を柱掘りかたとする掘立柱建物（図 55）。軸角は SB3、4 とほぼ平行するが、建物が調査区外へ広がらないので

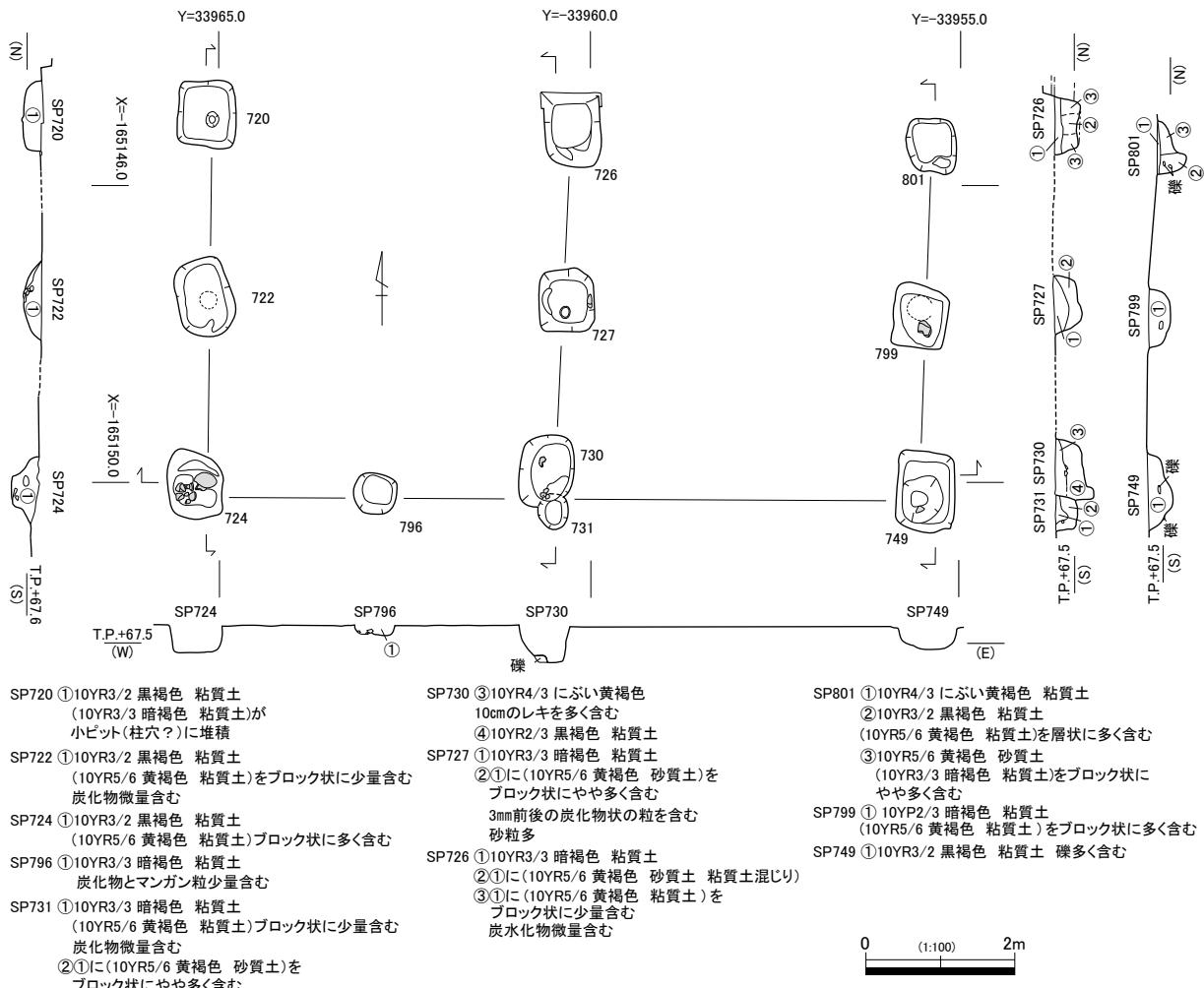


図 55 3-2 区 SB5 平面・土層断面図 (S=1/100)

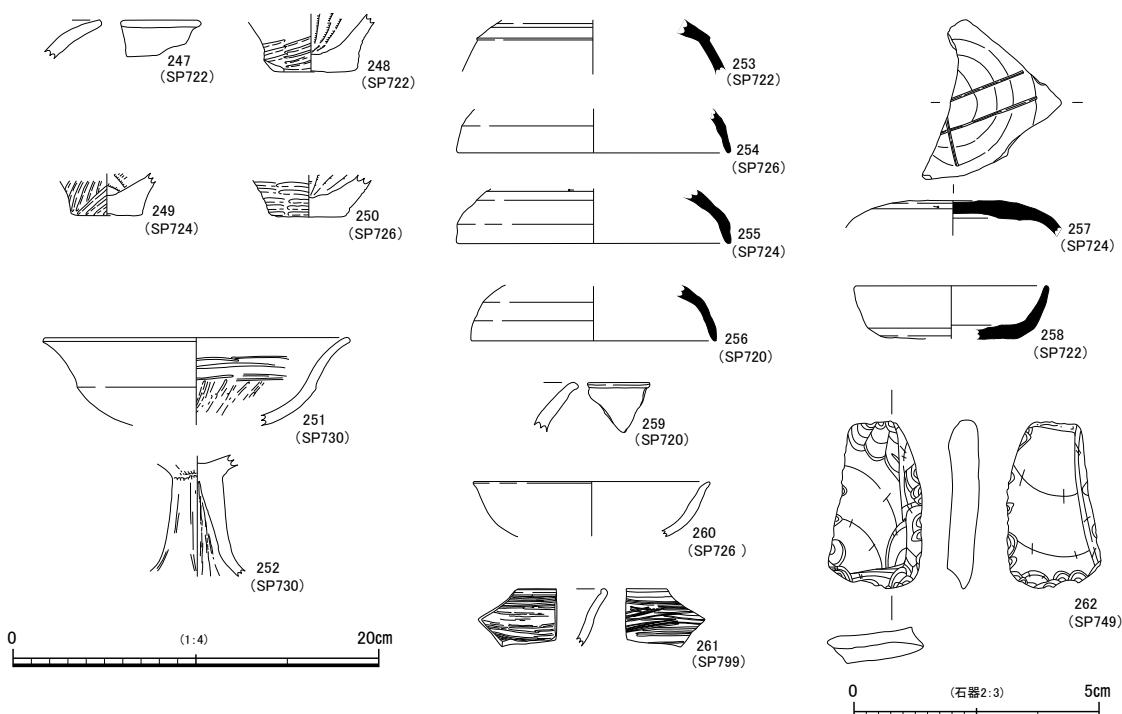


図 56 3-2 区 SB5 掘りかいた出土遺物実測図 (S=1/4, 石器 S=2/3)

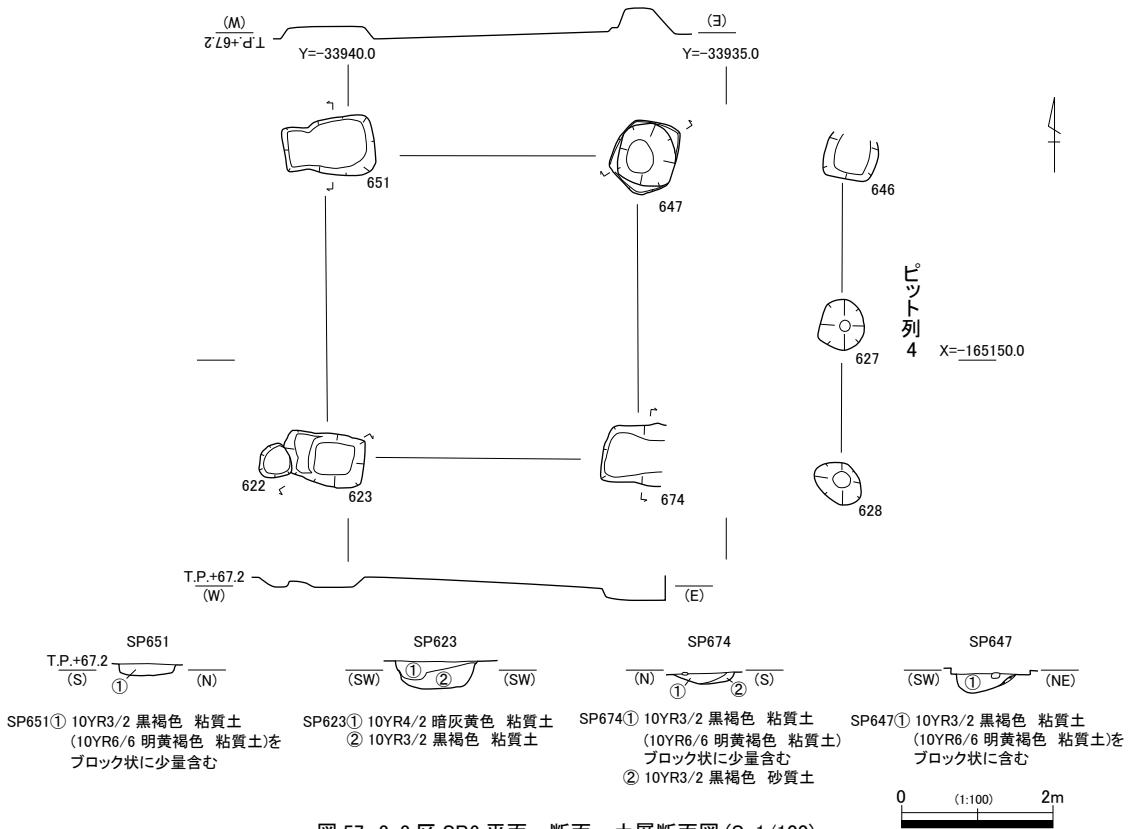


図 57 3-3 区 SB6 平面・断面・土層断面図 (S=1/100)

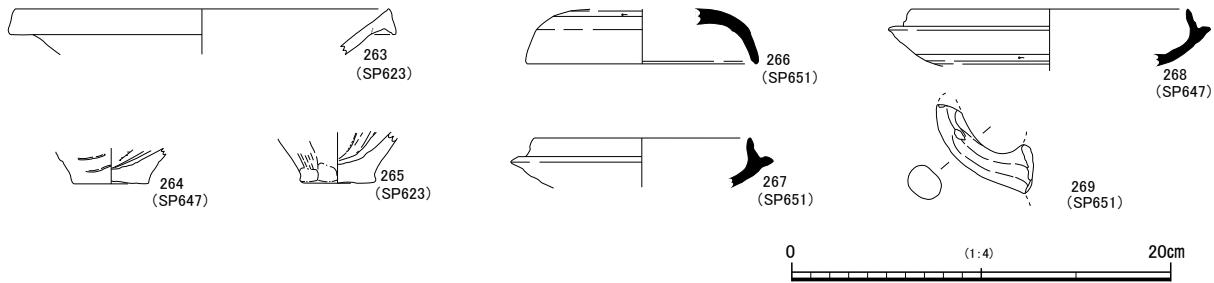


図 58 3-3 区 SB6 掘りかた出土遺物実測図 (S=1/4)

あれば、建物方向は N – 92° – E で、唯一東西を向く。南辺 SP796 は浅く、SP730 – 749 間に柱穴は確認できなかった。SB3 も東西間の柱間距離が長く、東西方向の掘りかたが一つおきに浅いものであったと想定すれば、削平によって検出できなかった可能性はある。

規模は桁梁 4 × 2 間、9.5 × 5.1m、面積 39.0m²以上を測る。掘りかたはやや不定形なものだが、長方形を基本とし、100 × 70cm 前後、深さ 30cm 前後、深いものでは 15cm 程度。西辺 SP722 の断面形態は半円状となり、掘りかたとしては心許ないが位置を重視した。柱穴痕跡は平面では検出できず、土層断面や底面形態からの推測である。柱間距離は桁梁とも 2.4m 前後に復元できる。

また建物西側部分で SP705 ~ 710、811 や SP712 ~ 718 が東西にぶれつつも列を成している（図 37、61）。前者は SB5 の桁行方向の柱間距離にほぼ等しい距離をもって位置する。SP720、722、724 と別の建物となることも考えたが、SP705 と SP811 以外は 10cm 弱とごく浅く、明確な掘りかたとして認識できない。検出した掘立柱建物が明確な柱掘りかたを有していることを重視するなら、否定できるものと考える。

なお南北方向では、掘りかたの間にもやや小規模なピットが並ぶ（図 37、61）。建物として捉えるこ

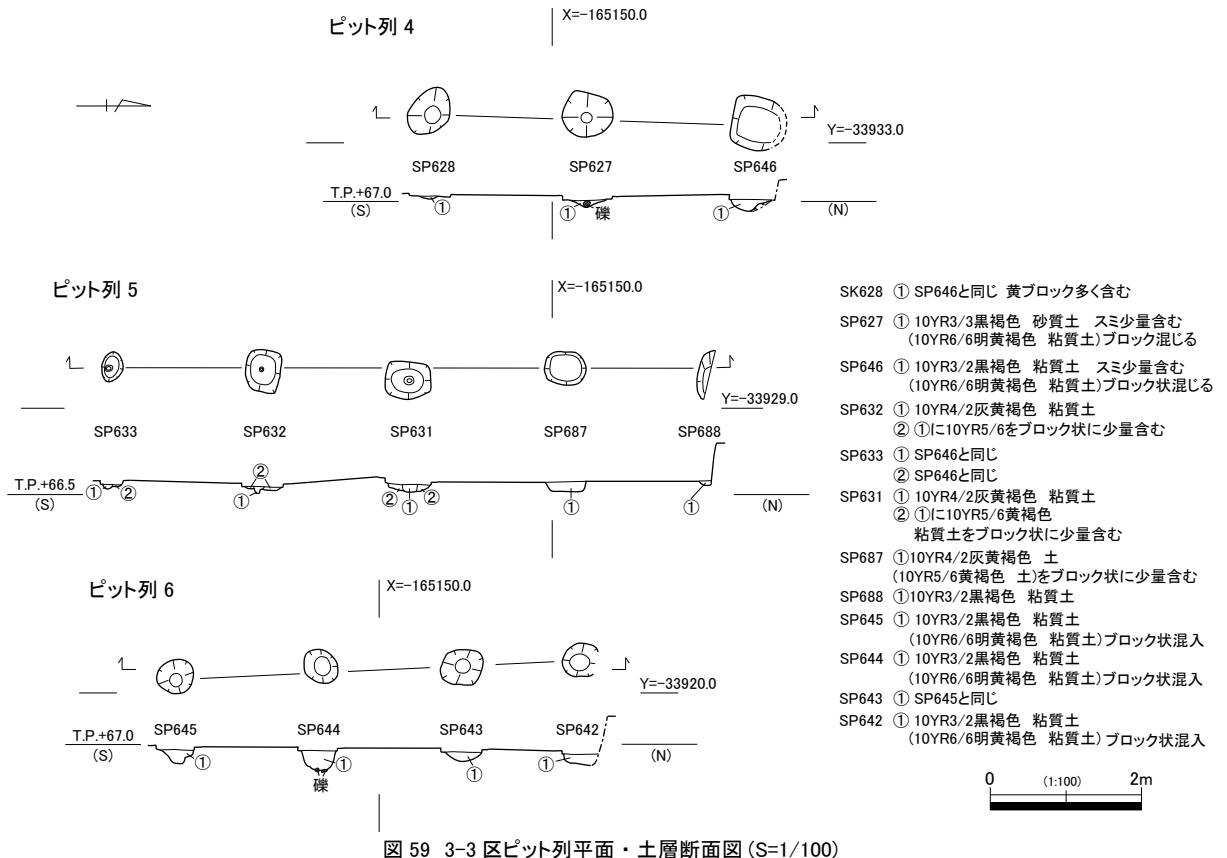


図 59 3-3 区ピット列平面・土層断面図 (S=1/100)

とはできなかったが、SP731 は SB5 を構成する SP730 に切られており、SB5 以前の建物があつたと考えることもできよう。

SB5 の柱掘りかたからは弥生土器、須恵器、土師器、サヌカイト剥片が出土している。図 56－247 は甕の口縁部か。内面は黒変する。248～250 は弥生土器底部。いずれも外面はタタキ調整、内面は簾状ハケ調整。248 のタタキ調整は 8～9 分割で底部をめぐる。249 は角閃石と雲母を含む生駒山西麓産の胎土をもつ。250 は外底面もナデで平滑に整えられる。251・252 は高杯。接合はしないが同一個体であろう。251 は SP730 底面で出土した。復元口径 16.5cm を測る。稜をもって大きく外反する口縁をもち、脚部は中空。裾部はゆるやかに屈曲して広がるものと思われる。内外面とも風化が著しいがミガキ調整が施される。内外面は赤橙色。胎土精選。

253～257 は須恵器杯蓋。253 の稜は短くにぶい。254 は復元口径 14.7cm、残存高 2.4cm を測る。天井部と口縁部との境はやや強めに屈曲する。255 は復元口径 14.7cm、残存高 2.9cm。口縁部はわずかに外反する。256 は復元口径 13.3cm、残存高 3.0cm。器面は灰白色を呈する。257 は天井部外面に 1mm 強の幅の沈線で描かれたヘラ記号、内面には直線ナデ。258 は須恵器杯身。外底面には回転ヘラ切痕。復元口径 10.4cm、器高 2.9cm を測る。底部は平らに近く、口縁部へ外傾してのびる。

259 は土師器甕の口縁部。端部でわずかに外反する。260 は土師器杯 C。風化のため調整不明。261 土師器杯 A。内外面ともに暗文が施されるが、内面の放射状暗文は確認できない。平城Ⅲ段階までで捉えられると考えられ、SB5 の時期の下限を示すものであろう。

262 はサヌカイト製の楔形石器。長軸両極に敲打痕があり頂部には原礫面が残る。重さ 5.78g を測る。**SB6** 3-3 区、竪穴住居 SH625 に重複する桁梁 1×1 間の建物（図 57）。東に平行するピット列 4 を庇部分と考えることもできる。建物方向は N-1°-E で、ほぼ南北（東西）である。柱穴痕跡を検



図 60 3-1 区ピット土層断面図 (S=1/50)

出できず、規模は推定で $4.1 \times 4.1\text{m}$ 、面積 16.8m^2 となる。掘りかたは約 $80 \times 120\text{cm}$ のややいびつな長方形だが SP647 は一辺 80cm ほどの隅丸方形を成す。検出面からの深さは $15 \sim 35\text{cm}$ と一定しない。

掘りかた埋土から弥生土器片、須恵器片、土師器片が出土している。図 58-263 は弥生土器壺の口縁部。端部は下方へ肥厚する。264、265 は弥生土器底部。266 は須恵器杯蓋。復元口径 12.2cm 、器高 2.9cm 。267、268 は須恵器杯身。いずれも立ち上がりが短く上方にのびる。復元口径はそれぞれ 11.4cm 、 14.6cm 。269 は土師器把手。断面は扁平な円形を成す。

これら SB3 ~ 6 の掘立柱建物群は、ほぼ南北に軸角をそろえており、同時代のものと考えられる。掘りかたの遺物は小片が多く弥生土器が混在するが、須恵器や土師器がその年代を示すものであろう。須恵器は杯 H が存在し、初現期の杯 G の出土を見ない。よって造営時期は 6 世紀後葉から 7 世紀前半に求めることができよう。廃絶の時期は、10 世紀頃の黒色土器が出土した SB4 以外では、8 世紀代を下限とする。建物を構成していないピットの多くも、同じく南北方向の列を指向していることから、さらに数棟の建物が 6 世紀後葉以降、平安時代にわたって営まれていたものと想定できる。

(5) ピット列・ピット・土坑 (図 59 ~ 62)

3-3 区では SB6 以東に、ピット列 3 列がほぼ平行して並ぶ (図 59)。検出面からの深さは $10 \sim 20\text{cm}$ 未満と浅く、遺構上部はかなり削平されている。SD638 に切られる SP636、637 も同様に列を成す可能性がある。

ピット列 4 (SP627、628、646) 3-3 区のほぼ中央に位置する。前述したように SB6 と方向を同じくし、庇となる可能性もある。列方向は N-1°-E、南北 2 間、 4.1m 以上を測る。柱間距離は推定で 2.1m 前後、掘りかたは直径 60cm 前後の不整円形。

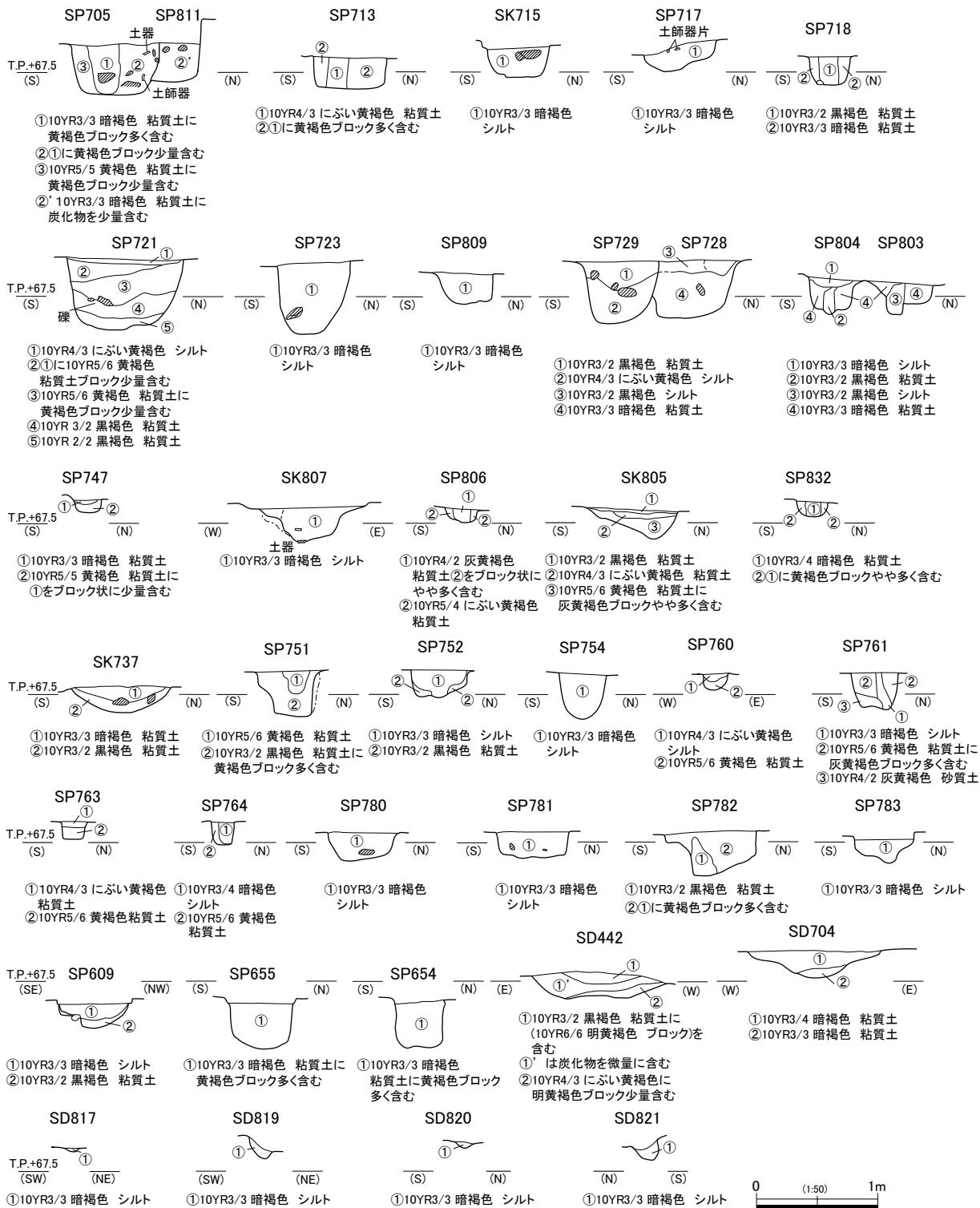


図 61 3-2・3 区ピット・土坑・溝土層断面図 (S=1/50)

ピット列 5 (SP631 ~ 633、687、688) 3 - 3 区で SH630 の壁溝を切る。唯一柱痕が検出できているが柱通りは悪い。列方向は N - 2° - E、規模は南北 4 間、8.0m 以上。柱間距離は約 2.0m、掘りかたは 60 × 50cm 前後の円形もしくは隅丸方形。

ピット列 6 (SP642 ~ 645) 3 - 3 区東端で検出した。列方向は推定で N - 3° - W とやや西に傾く。南北 3 間、5.4m 以上を測る。柱間距離は推定 1.6 ~ 2.0m と一定しない。掘りかたは直径 45cm 程度の不整円形。ほかのピット列よりやや深い。

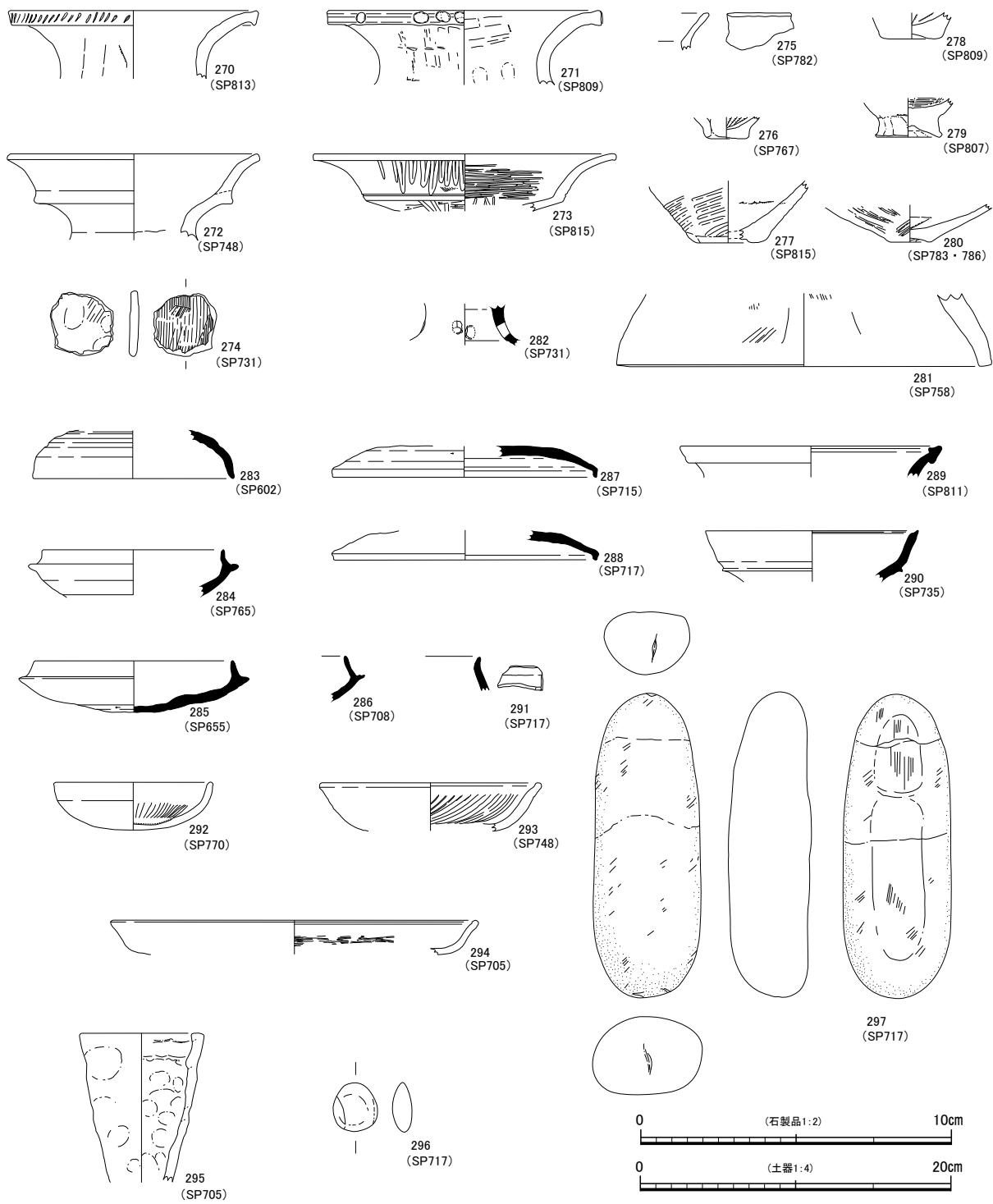


図 62 3-2・3 区ピット出土遺物実測図 (S=1/4, 石製品 S=1/2)

以上のピット列 4～6 は、掘立柱建物と軸方向を同じくしており、集落東端を区画する柵列と想定することも可能と考える。

そのほか建物としては復元できなかったが、柱掘りかたと思われるピットを 3-1～3 区で検出した（図 35～38、60、61）。特に 3-1 区西端では、東西方向に SP501、403、402、404、502、南北方向に SP426～429、503～505、424 が列を成しており、方向も SB3～5 とほぼ平行する（図 36）。SB3 と重複する位置にあり、SB3 に先行する建物の存在を考えるべきかもしれない。なお 3-2 区検出のピットは SB5 と関連して既述している。

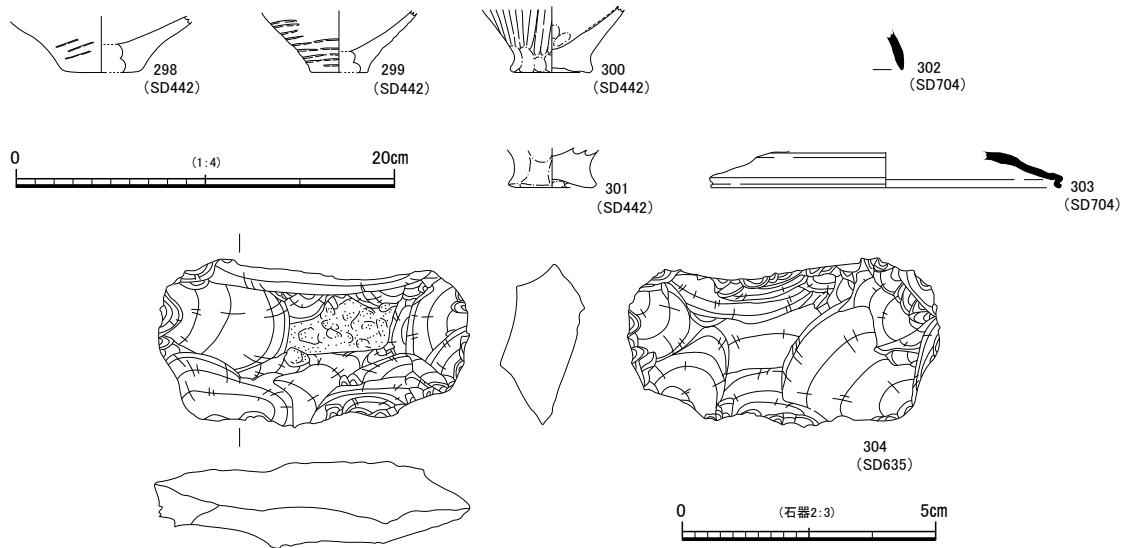


図 63 3 区 SD442,635,704 出土遺物実測図 (S=1/4, 石器 S=2/3)

出土遺物（図 62）は弥生土器や土師器、須恵器が混在するピットが多く、年代を確定できるものではないがおおよそ弥生時代後期から平安時代までの土器が出土している。270～281 は弥生土器。270、271 は広口壺。270 は列点文、271 は円形浮文が施される。272 は二重口縁壺。外反強く擬口縁の接合部は突帯状に張り出す。273 は高杯。杯部高は低いが、口縁部は大きく外反し、屈曲部には浅い沈線がめぐる。274 は土製円板。今回調査区内では珍しい。外面にハケ調整、内面に指痕。275 は甕の口縁部。内外面とも黒変する。276～280 は底部。276 は底径 2.6cm と小形化している。277 はドーナツ状の底部に穿孔が施されている。278 もドーナツ状の底部。279 は脚台状。280 は壺の底部であろう。外面にミガキ調整が残る。281 は器台か。裾部はわずかに屈曲して端面で面を成す。

282～291 は須恵器。282 は有蓋高杯の脚台部であろう。透かし孔はやや不定形だが円形。283 は杯 H 蓋。復元口径 12.9cm、残存高 3.1cm。口縁部からやや天井部よりに凹線状のくぼみがめぐる。284～286 は杯 H 身。285 以外は小片。284 の立ち上がりは内傾した後直立する。285、286 の立ち上がりは短く内傾し端部は丸い。287、288 は杯 B 蓋。口縁端部を下方に折り曲げる。289 は甕の口縁部か。端部は内傾する凹面を成し、鋭い稜を認める。290 は甕の口縁部であろう。鋭い稜をもった凸線が屈曲部にめぐる。291 は短頸壺の口縁か。

292～294 は土師器。292 は椀。内面には放射状暗文を施し、口縁部はヨコナデ、体部外面は不調整のまま残す。口径 10.0cm、器高 3.1cm。293 は杯。復元口径 14.0cm、内面には口縁内面には沈線状に凹む。外面調整不明。294 は皿。復元口径 23.3cm、残存高 2.2cm。口縁端部内面には強い沈線がめぐる。器面の剥離著しいが、内面に放射状暗文が見られる。295 は製塩土器。手づくね成形で、口縁端部内面にはナデによる段が作られる。

296 は碁石か。直径約 1.5cm。黒色の自然の円礫を利用したものと思われ加工痕は観察できない。297 は砂岩製の磨石。擦痕は全体に見られるが、長軸両端に切り目状の欠けがあり、敲打痕も目立つ。全体被熱して赤変する。

図示したもののほか年代の分かるものとしては、SP440、444 から黑色土器 A 類、SP462 から平安時代の須恵器壺の口縁部、SP510 からは TK209 式期前後の須恵器杯が出土している。

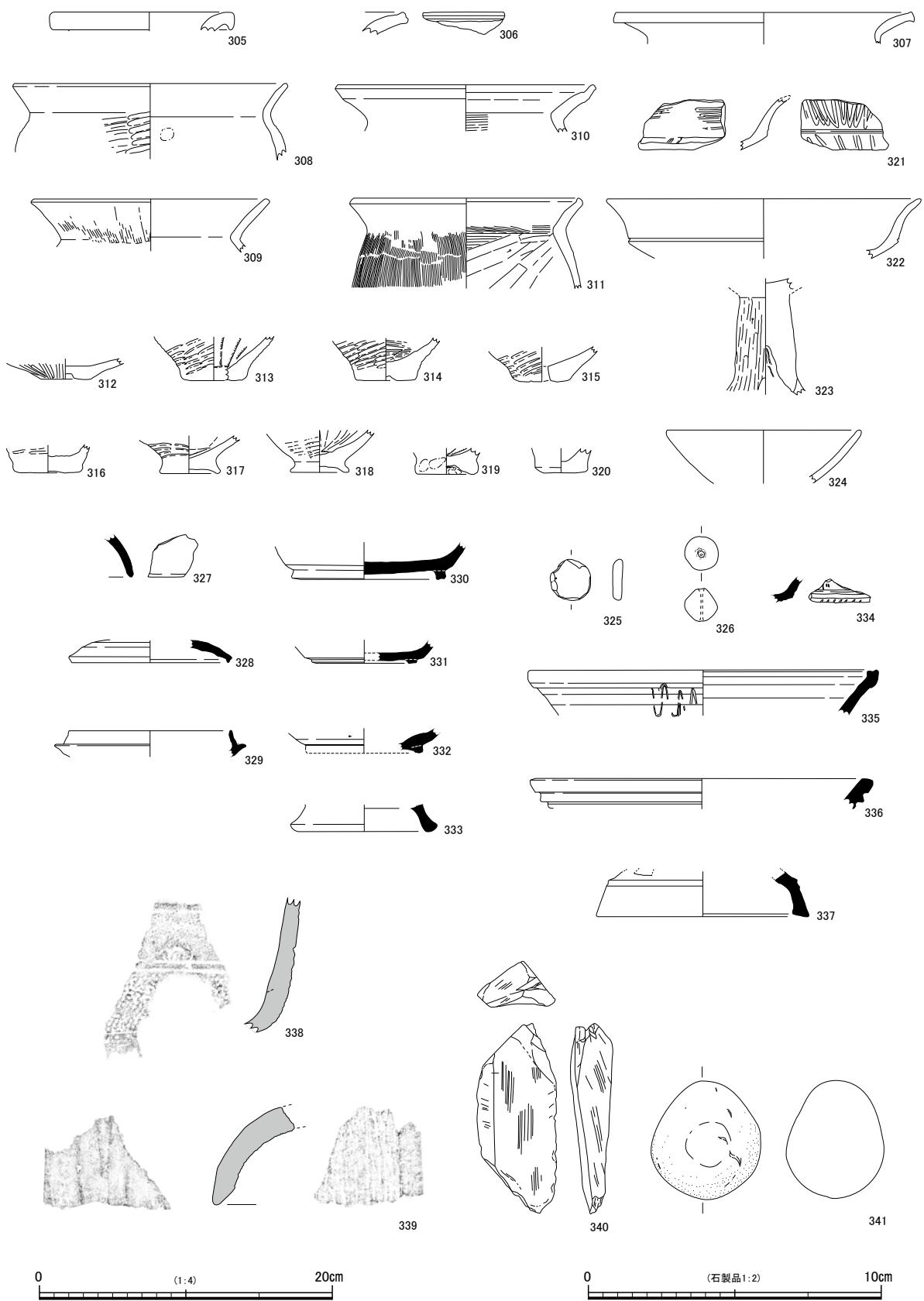


図 64 3 区包含層出土遺物実測図(1) (S=1/4, 石器 S=1/2)

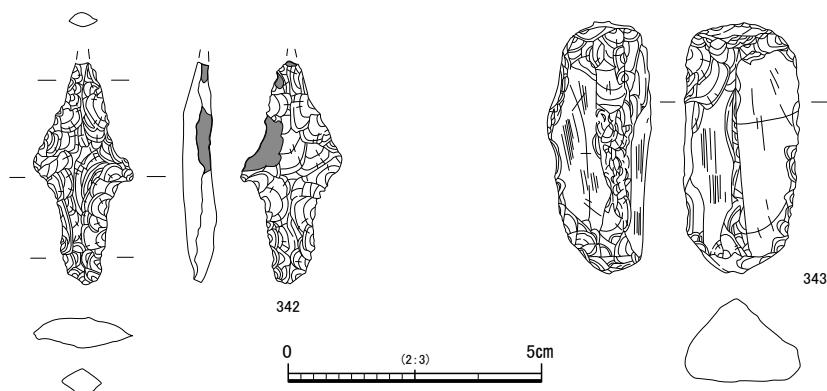


図 65 3 区包含層出土遺物実測図 (2) (S=2/3)

(6) 溝 (図 35・61・63)

3-1～3 区にわたって、数条の溝がほぼ南北に走る（図 35）。幅 0.7～1.1m、深さ 20cm 前後の広くやや深い溝（SD442、638、704）と、幅 0.8m 前後の深さ 10cm 強の広く浅い溝（SD629）、幅 0.3～0.6m、深さ 10cm 前後（SD455、603、634、635）の細く浅い溝がある。長軸方向が SB3～5 やピット列とほぼ平行しており、何らかの関係をもつものと考えておきたい。

SD629 は遺物の出土がなく、SD442 は弥生土器片のみが比較的多く出土する。そのほかの溝は弥生土器を主体に、須恵器片や土師器片が少量混在して出土する。そのほか SD634 から瓦器片が、SD704 からは、東播系擂鉢片も出土している。図 63-298～301 は弥生土器底部。300 はミガキ状の痕跡が残るが風化のため不明瞭。302、303 は須恵器杯蓋。303 は天井部は平坦で、口縁端部が「Z」字状をなすもの。

SD635 から出土した 304 はサヌカイトの削器もしくは楔形石器。原礫面を残す剥片で、図の上部に先行剥離面をもつ。短軸方向両極に敲打痕。長軸 6.2cm、短軸 3.2cm、厚み 1.5cm、重さ 36.2g。

(7) 遺構に伴わない遺物 (図 64・65)

図 64 には耕作土や包含層から出土した遺物を示した。305～310、312～325 は弥生土器。311 は土師器。305 は壺の、306～311 は甕の口縁部。308 は外面黒変、内面赤変する。310 は受口状の口縁をもち、端部は面をなす。311 の体部内面は工具を強くナデ上げ、ケズリ状となる。口縁端部は上方に突出する。312～320 は底部。形態はドーナツ状（312、314）、平底（313、316、320）、上げ底や台状のもの（317～319）など多様。内面の簾状ハケ調整が目立つ。312 の外面はミガキ調整が施され、体部へ大きく開くことから壺と考えられる。314 は内外面赤変する。315 は底部穿孔。316 は粘土充填手法による成形で内面に指オサエ。317 は内面にミガキ状の痕跡が認められる。鉢か。318 は内面ハケ調整。体部へとナデ上げる。319 は簾状ハケ調整。320 は底部径 3.6cm と小型。321～324 は高杯。321 は図 62-273 と胎土・調整ともよく似ており同一個体の可能性がある。322 は風化のため調整不明。口縁部と受部の屈曲部に沈線がめぐる。323 は脚部の中ほどまで中実。外面は縦方向のミガキ調整。SH625 検出中の出土。324 は鉢もしくは高杯であろう。325 は転用の土製円板。326 は土玉。穿孔が施され、中位に稜のある菱形状を呈する。直径 2.2cm、9.1g。

327～337 は須恵器。327、328 は須恵器杯蓋。329 は杯身。330～332 は杯 B。330 の高台は低くわずかに外反し、内端部で接地する。331 はごく低い高台が「ハ」の字状にひらく。332 は風化のため高台形状が不明瞭である。333 は壺の高台部。内端部で接地する。334 は無蓋高杯、もしくは穂か。

屈曲部には沈線を、杯部側面と下面には刺突文を施す。335、336は甕の口縁。335の口縁端部は内傾する凹面をなし、稜をもつ。外面には沈線による簡素な波状文文様。自然釉がかかる。336は沈線によって口縁部に凹線をつくる。337は台付長頸壺の脚台部であろう。屈曲部には沈線を施し、透かし孔が一部残る。

338は瓦器火鉢。沈線がめぐる上方は花弁状のスタンプを押捺し、下方は円形刺突を繰り返したような凹みがめぐる。下面是ヘラケズリ状。内面は上端破損部から幅約3cmに煤が付着する。

339は丸瓦。凸面は長軸方向の丁寧なミガキ調整、凹面は布目痕と、破線状の紐痕が明瞭に残る。

340は砥石。砥面は図示した幅の広い面と、その両側面2面、頂部であわせて4面ある。石材は片麻岩状で仕上げ砥であろう。341は円礫。いびつな球形で、敲打して成形後、全体を研磨している。黒色の密な石材で白色の縞が一部観察される。直径3.4～4.0cm、重さ57.0gを測る。

図65－342は凸基式の石鎌。図中黒色で示した部分は新しい欠損。主剥離面の側辺の細部調整が粗く、未製品の可能性もある。石材はサヌカイトで、長軸4.3cm、短軸1.9cm、厚さ0.7cm、重さ4.0gを測る。343は楔形石器。頂部、側縁は全て敲打痕がみられ、特に頂部に著しい。2面に研磨が見られる。長軸4.9cm、短軸2.3cm、厚さ1.6cm、重さ22.6g。

(8) 小結

3区では、弥生時代後期と飛鳥から平安時代の遺構を検出した。弥生時代の主要な遺構としては、方形のプランをもつ竪穴建物SH625、630が挙げられる。その西側でも手焙形土器が出土したSD778や、弥生土器が多量に出土するSX741があり、3－2・3区の南北に居住域が広がっていたものと思われる。調査区北東方向(3－4区)は谷地形となり、遺構・遺物とともにほとんど検出しておらず、集落の境界として捉えられる。弥生土器には高杯の形態や、手焙形土器の存在、甕底部の内面調整に簾状ハケが目立つといった特徴をもっており、3区では後期後葉に集落が営まれていたものと思われる。

飛鳥から平安時代では、方形の掘りかたをもつ掘立柱建物を4棟検出した。遺物から6世紀後葉から7世紀前半にかけて造営され、SB4では10世紀頃、そのほかは8世紀代までに廃絶されたものと思われる。掘立柱建物掘りかたの間に並ぶピットについてはやや遡るかもしれないが、ピット列などについても南北方向を意識した集落が構成されており、ほぼ同時期に位置付けられるものと考える。

そのほか特に取り上げていないが、直径20cm以下の円形ピットも多数検出している。ごく少量ながら瓦器片や東播系須恵器片等も包含層等から出土しているため、中世期にもやや低調ながら遺構が形成されていたものであろう。

第7章 1・2区出土埴輪

1・2区からは円筒埴輪(344～347)と朝顔形埴輪(348)が出土している(図66)。344は1区包含層、345は1区SD7、346、347は1区SD10、348は2区SX299から出土した。3区からの出土はない。いずれも小片で、別時期の遺物が卓越していることから、調査区周辺からの流入と想定される。

暗橙褐色で堅く焼き締まる344と、明褐色を呈し軟質の345～348がある。いずれも黒斑の有無は不明。唯一調整が観察できる朝顔形埴輪(348)は外面にタテハケ、内面は斜め方向にハケ調整が施される。

1・2区から200～300m北東に離れた丘陵上で、方墳3基に伴って川西編年Ⅲ期の円筒埴輪と形象埴輪が出土している(86年度調査区)。今回調査区周辺は平坦な耕作地となっており、地形から古墳の存在を伺い知ることはできないが、想像をたくましくすれば古墳時代の墓域が1・2区周辺、梅川を臨む丘陵上にも広がっていたと考えることができよう。

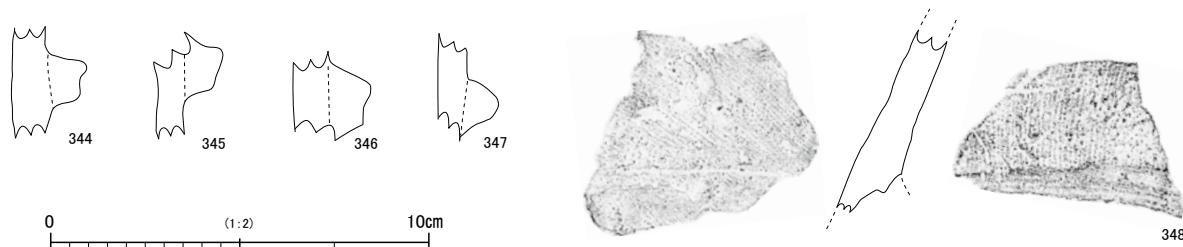


図66 1・2区出土埴輪実測図 (S=1/2)

第8章 まとめ

今回の調査では、遺跡範囲の拡大を見、弥生時代後期、飛鳥・奈良・平安時代、中世の集落の一端を窺い知る資料を得た。既往の調査成果とあわせて各時代について概観し、まとめとしたい。

弥生時代 従来から弥生時代高地性集落として名高い遺跡として、集落域がさらに広がった意義は大きい。居住域は丘陵南部（68・69年度調査区）と、丘陵中央部（大阪府84年度試掘調査14・15トレンチ、94年度B・C調査区）に求められていたが、今回の調査で西部の中位段丘上（3区）にも広がった。今回検出した竪穴建物については以下の通りである。

	遺構名	平面形	方向	推定床面積	標高	備考
3-3区	SH625a	長方形	N - 30° - W	17.5 m ²	T.P.+67.3m	壁溝 SD656
3-3区	SH625b	長方形	N - 30° - W	22.1 m ²	T.P.+67.3m	壁溝 SD686
3-3区	SH625c	方形	N - 30° - W	27.0 m ²	T.P.+67.3m	壁溝 SD694
3-3区	SH630	方形	N - 5° - E	14.1 m ²	T.P.+67.0m	

検出遺構面はT.P.+67m前後で、比高差約20mで梅川の流れる低地に至る。遺跡の存在する独立丘陵南部では標高90～105m、中央部ではT.P.+80～90mで竪穴建物を検出しており、20～30m低い土地を選地していることになる。墓域は2か所に分かれることとなり、丘陵中央（94年度C調査区）の土器棺墓2基と、中位段丘西端（1区）の方形周溝墓に求められる（図1）。

68・69年度調査報告における1～7期の時期区分は、遺構の切り合い関係によるものが大きく、全体に敷衍することは難しい。そのため遺物とあわせて、大きな画期として認識できる円形から方形へという竪穴建物のプランの変化をもって集落の変遷をとらえなおしてみよう。

高地性集落を印象づけた丘陵南部では、V様式前半から3つの尾根に分かれて竪穴建物が営まれており、重複関係から求められる継続期間も比較的長い。ここでは3期から竪穴建物に方形プランが出現し、7期にはすべて方形となって終息することが分かっている。丘陵中央部では、竪穴建物のプランはほぼ方形に限定されており、転換期とされる6～7期¹⁾、遺物から求められるV様式末からVI様式期に、集落の中心を尾根伝いに遷したものと思われる。ただし、94年度C調査区では円形の竪穴建物が検出されていることから、南部に居住域が存在していた時期と並行して集落域の拡大が図られていたのである。

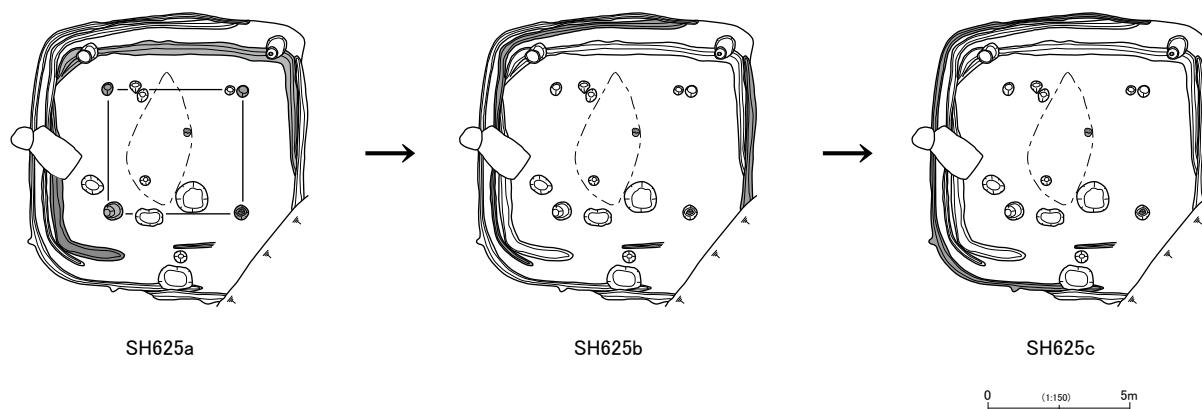


図67 3-3区 SH625 変遷模式図

ろう。84年度試掘調査の評価では、平和池北側の丘陵平坦地に溝をめぐらせた大規模な居住域が想定されている。その評価に基づき、ここを次の核として、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての集落は、尾根伝いに中心を遷しながら徐々に北上し、葉室遺跡、伽山遺跡に至るものと評価されている²⁾。しかし方形プランをもつ時期には、大型でガラス玉や鉈を有するといった際だった建物の不在や、重複関係に乏しいことから想定される継続期間の短さを指摘でき、未調査部の内容にも左右されるものの、丘陵南部のB区ほど明確な求心性をみせていない。そして今回の調査で検出した竪穴建物によって、当該期の居住域は拡散した印象を強めた。

土器棺墓のある丘陵中央部は、古墳時代まで土壙墓や古墳が造られ、墓域として意識されていた地区である。1区方形周溝墓出土土器は、SH625よりやや古い様相を呈するものの、方形プランが主流となっていく過渡期には位置付けられる。同時期性について確証を得ないが、1・2区で出土した埴輪片や須恵器類を最大限に評価するなら、削平された古墳が西部にもあったとして、同じく継続的な墓域の維持を想定することができる。低地の集落と同じく墓域が個別の居住域に対応するものであれば、方形周溝墓の造墓主体は、中央部ではなく、西部の未調査部分に求められる。方形周溝墓という墓制を土器棺墓より上位に据えるとすれば、平和池北側の丘陵平坦部には、丘陵南部と同質の中心性を求めるることは難しくなる。

ここで個別の竪穴建物に目を移してみると、SH625はV様式後葉からVI様式期にかけて長方形から方形プランへ変化し、推定で約5mずつ拡張している(図67)。中央部の方形竪穴建物も、建替えによる拡張傾向にあり、68・69年度調査における大型竪穴建物(床面積35m²以上)の棟数減少や床面積の縮小化傾向とは別に、個別の建物単位で安定した状況を見て取ることができる。

すなわち、個別の住居の安定性に基づいた居住域の等質的な性格と、個別の尾根をつなぐネットワークによって維持された集落像を、現段階では想定すべきではないかと考える。それが次に続く古墳時代前期には、隔絶した首長墓ではなく、墳丘をもたない土壙墓という形で表出することとなるのではないかと思われる。立地上、主要な生産基盤を稻作に求めることはできなかったことも、その一因と考えたい。

以上のことから、弥生時代後期から古墳時代にかけて単純に居住域を北に移していくだけでなく、内的な構造変化を伴いながら丘陵上に拡大していった様相を推定することができよう。

古墳時代前期から中期 古墳時代前期から後期には、86年度調査区で検出した土壙墓と古墳以外には顕著な遺構が見られない。1・2区で埴輪片や大型の須恵器壺、四耳壺などが出土していることから、上述したように削平された古墳があった可能性はあろう。

古墳時代後期から平安時代 6世紀後葉から8世紀にかけては、以下の掘立柱建物を検出した。

遺構名		桁×梁	方向	桁行×梁間	面積	
1区	SB1	(2) × 2	N - 4° - E	3.1 × 2.8 m	8.7 m ²	
2-1区	SB2	2 × 2	N - 0°	3.3 × 3.3 m	10.9 m ²	
3-1区	SB3	(3) × 1	N - 0°	(6.5) × 4.7 m	(30.6)m ²	
3-1区	SB4	(3) × 2	N - 2° - E	(6.6) × 4.6 m	(30.4)m ²	
3-2区	SB5	4 × (2)	N - 92° - E	9.5 × (4.1)m	(39.0)m ²	
3-3区	SB6	1 × 1	N - 1° - E	4.1 × 4.1 m	16.8 m ²	※()は推定値

特に3区では南北におよその軸角をそろえ、方形の柱穴掘りかたをもつ建物群や集落域を区画するピット列が集中する。SB4はやや小型の掘りかたをもち、廃絶時期が10世紀まで降る可能性があり、その他の円形小型ピットで構成されるだろう建物とともに飛鳥から奈良・平安時代にわたる集落域が想定される。2区SB2も同じく軸角をそろえており、周辺のピットとともに集落域が広がっていたものと推定される。丘陵中央部（94年C調査区）でも掘立柱建物もみられるが散発的で、今回の3区が当該期の集落の中心として位置づけられることとなる。

東山遺跡の南西、河南台地上に位置する山城廃寺では、飛鳥・奈良時代、東西方向に主軸をそろえた大型の方形柱穴をもつ建物群や多量の製塙土器が検出されており、白鳳期（7世紀後半から8世紀初頭）の古代寺院「山城廃寺」に係る施設と推定されている³⁾。この西側でも軸角をおよそ南北方向にし、方形柱穴をもつ掘立柱建物を検出し⁴⁾、南の別井遺跡南端でも方形の柱穴掘りかたが確認される⁵⁾など、河南台地に古代の建物群が立ち並んでいた様子が復元される。千早川流域の寛弘寺遺跡でも建物自体は復元されていないものの、方形の柱穴掘りかたや、現在の地割と方向を違え、奈良時代に遡り得る畦畔遺構が検出されている⁶⁾。

千早川・梅川流域で大規模な開発がおこなわれ、集落が形成されていたことを推定させるものである。東山遺跡は立地を異にするもの、方角をそろえた建物群はこうした遺跡との関連を推測せるもので、集落の性格について断言することは難しいが、一般集落とは異なる建物、わずかに出土した製塙土器や青磁器、交通の一環を担った梅川を西方に臨む位置にあることなどもあわせて、地方氏族の居館として捉えることも可能であろう。

6世紀後葉から8世紀代の墓域は遺跡内では一須賀古墳群の一つ、WA1号墳が南部丘陵にあるのみだが、周辺を見渡せば谷を挟んで南に広がる一須賀古墳群や、北の磯長谷、南の平石谷の終末期古墳など枚挙に暇がない。しかし東山の集落には、王陵クラスと評される大型古墳や、一須賀古墳群の被葬者に求められる官人や渡来人系の氏族といったイメージを喚起する資料は出土していない。近接する位置にある集落と墓域ではあるが、被葬者は別に求めるべきであろう。また奈良時代以降の墓域としては、南部（68・69年B地区）で土壙墓、土器棺墓、火葬墓、丘陵中央で86年調査区の火葬墓、刀子の出土した土壙墓、94年A調査区の火葬墓（8世紀前半）、C調査区の土器棺墓が検出されている。居住域とは離れた丘陵上に散発的に営まれていたものと思われる。

中世 古代の集落は11世紀にはいったん廃絶するよう、次の盛期は1・2区丘陵西端部にピットや溝、土坑、掘立柱建物などが営まれる14～15世紀を中心とする。古く見れば13世紀中頃に溝や土坑が形成され始めており、1区北側の落ち込みが14世紀前半には埋没し始め、その南側を走る溝は15世紀代まで機能している。中世中頃から新たに整地が行われ、土地利用が進んだものと捉えられる。また検出した土坑には、底面に礫をならべるものや、被熟するものなど性格の不明なものが多い。焼土坑については、一須賀古墳群東部の丘陵上でまとまって検出されている⁷⁾ほか、寛弘寺遺跡など周辺の遺跡でも散見されるが、その時期や性格については墓や炉など諸説あり、一定の結論を得ていない。今回の検出例も類例を増加させたにとどまった。

さて中世の遺物には、数点にとどまるものの大和型の羽釜や瓦器椀が含まれる。ほとんどが小片で良好な資料ではないが、参考として今回の調査区出土の破片数を母数として比率を挙げる。瓦器椀は時期の分かるものは尾上編年IV期（和泉型）に限定されており、浅い皿状のものも含めて131片中21片（個体数：2点）、約16%が大和型である。羽釜は土師質107片、瓦質228片を数え、うち大和型は8片（個

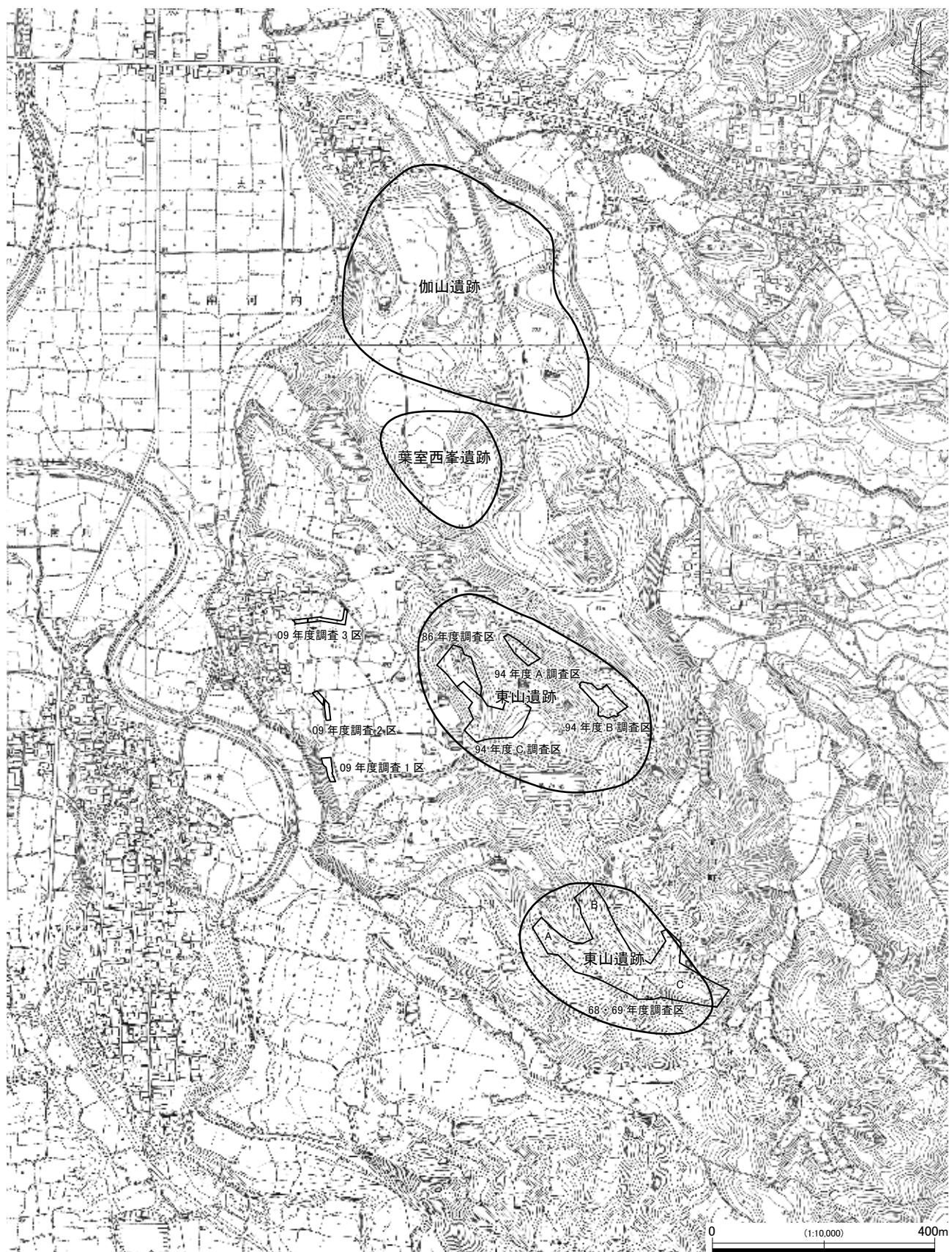


図 68 東山遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

体数 8 点) で約 2 % に過ぎず⁸⁾、かなり低い比率である。南河内南部で当該期の大和型瓦器椀が出土しているのは、同じ山塊上だが太井川流域にある太子町植田遺跡で、大和地域との関係で評価されている。大和型羽釜は同じく植田遺跡と、千早赤阪村誕生地遺跡のほか河内長野市域、青磁器も同様に限定された遺跡から出土している⁹⁾。

東山遺跡は竹内峠、平石峠からほぼ中間に位置しており、葛城山を越えて大和地域と交流をもつことは容易であったと考えられる。奈良県吉野金峯神社の建武元（1334）年九月の文書に、寺領として「河内国加納庄、東山庄、板持名田三反」が挙げられている¹⁰⁾。この調査区に限定されるものではないが大和地域との関係の深さを示唆するものと言えよう。

以上、雑駁ながら今回の調査にかかる時代について述べてきた。独立丘陵上に立地する東山遺跡は、集落の変遷が捉えやすい立地にある。今回の調査は弥生時代後期の集落変遷の一端を明らかにし、さらに多時期にわたる集落遺跡を捉える貴重な成果となった。町内には多岐にわたる良好な遺跡が分布するものの、未解明な部分を多く残すのも事実である。寛弘寺遺跡や一須賀古墳群、中世山城などといった特徴的な遺跡にとどまらず、さらに広域にわたる地域との関係のなかで検討を行い、遺跡を位置付けていく必要がある。

また遺跡範囲の拡大に伴い、低・中位段丘部でも慎重な調査が必要となった。従来の遺跡範囲である標高 80 ~ 100m の丘陵以外に、地図上平坦な田畠となっている段丘上へも遺跡が広がる可能性を指摘しておく。加えて集落が広がると予想される今年度調査区の中央部や、平和池北側は造成から外れており、集落の中心部分とされる区域は未解明である。しかし、逆に言えば遺跡の保存が図られた結果と評価でき、関係者の尽力によって近づき飛鳥風土記の丘として保存の図られた一須賀古墳群、寛弘寺古墳公園として丘陵の一部を残す寛弘寺遺跡とともに、大阪芸術大学体育館内に地形と古墳の模型を展示する東山遺跡についても、集落の中心部分への期待を残しつつ、今後も保存と活用が図っていきたい。

1) 68・69 年度調査では、建物の廃絶、土器の廃棄、建物の方形プランの出現、区画溝の出現から 3 期に、建物の廃絶、土器の廃棄、小型から大型への建物の変化などから 6 期に転換期があり、短期間、山を降りた時期があったとしている。

2) 赤井毅彦 1998 「第IV章　まとめ」『大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う東山遺跡発掘調査報告書』河南町文化財調査報告第 2 冊 p.p.65 – 67 河南町教育委員会

3) 大阪府教育委員会 2010 『山城廃寺発掘調査概要報』

4) 未報告。2010 年河南町教育委員会調査。未整理であるが、包含層からは円面鏡が出土している。

5) 未報告。赤井によると立会調査で検出し、掘削深度が及ばなかったため上面の検出にとどまったものである。

6) 上林史郎 1987 『河西西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要 V I』大阪府教育委員会

7) 一須賀古墳群発掘調査委員会 1996 『太子カントリー俱楽部建設に伴う植田遺跡ほか発掘調査報告書』

8) 瓦器椀についても個体数を分子とすれば約 2 % で同率となる。

9) 藤田徹也 2008 「南河内における中世前半期の土器概観」『南河内における中世城館の調査』 p.p.14 – 22 大阪府教育委員会

10) 河南町誌編纂委員会 1968 「波瀾つづきの中世」『河南町誌』 p.p.116 – 117 河南町役場

※ 図 1 と図 68 は国土地理院 1961、図 3 は国土地理院 2007 から作成した。